第 19 回

神奈川県遺跡調査・研究発表会

発　表　要　旨

1995（平成7）年9月23日（土）

於　川崎市中原市民館

主　催　神奈川県考古学会

後　援　神奈川県教育委員会
川崎市教育委員会

神奈川県遺跡調査・研究発表会発表目次

Ⅰ　開　会

Ⅱ　発　表　（午前の部）

1．相模原市横山５丁目遺跡 …… 大坪宣雄・長澤邦夫　1

2．清川村宮ヶ瀬遺跡群北原（No.10・11北）遺跡
…… 市川正史・能嶋政義・恩田　勇・冨永樹之　4

3．横浜市阿久和宮腰遺跡（一次調査）…… 戸田哲也・中山　良　8

4．三浦市油壺遺跡 …… 須田英一　12

5．藤沢市若尾山遺跡 …… 継　　実　15

6．第一東海自動車道 No.14（三ノ宮・下谷戸）遺跡
…… 宍戸信悟・飯田純友・宮坂淳一・櫻井真貴・三瓶裕司・畠中俊明　18

Ⅲ　記　念　講　演

神奈川県の「地震考古学」 …… 神奈川県立旭高等学校教諭　上本進二　22

Ⅳ　発　表　（午後の部）

7．川崎市久本横穴墓群 …… 後藤喜八郎　24

8．平塚市構之内遺跡 …… 日野一郎・上原正人　29

9．国指定史跡永福寺跡 …… 福田　誠　33

10．山北町河村城関連遺跡 …… 安藤文一　39

11．小田原市三の丸小学校内遺跡（小田原城三の丸・藩校集成館跡）
…… 戸田哲也・小林義典・香川達郎・中村哲也　44

Ⅴ　閉　会

（表紙の写真は、川崎市久本横穴墓群６号横穴墓の奥壁線刻画）

1. 相模原市横山5丁目遺跡

大坪宣雄・長澤邦夫

1．所　在　地　相模原市横山５丁目4700番地３外

2．調査主体　(仮称)相模原市立屋内水泳場建設事業地内遺跡調査団

3．調査担当者　大坪宣雄・長澤邦夫

4．調査目的　相模原市立屋内水泳場建設に係わる記録保存調査

5．調査期間　平成６年１月10日～平成７年３月30日

6．調査面積　7,513㎡

7．遺跡の立地

本遺跡は相模原市の中央部やや北西寄り、ＪＲ相模線上溝駅から北へ約500ｍの所に位置する。地形的には相模野台地の北西端、相模川右岸に丹沢山塊と接する愛甲台地、境川左岸の多摩丘陵とに挟まれた洪積台地上に立地している。標高は118～121ｍ前後を測る。本遺跡の南側１㎞には相模川河岸段丘の田名原面に道保川・姥川・鳩川が蛇行して流れている。また４㎞ほど北東には東京都との都県境に境川が流れている。遺跡に隣接する東側には小支谷が南下しており北側では県道相模原愛川線が相模川へと駆け下っている。これらの高見には相模原市横山公園があり、遺跡はその台地上に位置している。

遺跡の現状は、横山公園に隣接する神奈川県蚕業センター及び園芸試験場跡地で(第3図)植林•園芸跡地であった。遺跡は中央部分が市道によって隔てられ南北に区画されており、この台地の東側部分の南北350ｍ、東西100ｍほどが遺跡範囲となっている。本遺跡の近隣には先土器時代の石器群を中心に出土した上溝遺跡が位置する。また南西200ｍには1981年に調査が行われ縄文時代中期の住居址を中心として出土した横山公園野球グランド遺跡が位置する。

8．調査の経緯

今回の調査の対象となった市立屋内水泳場建設事業用地は、平成10年に開催される神奈川国体夏期大会の分散会場の一つとして、また老朽化の進んだ水泳プール等の建物の改築を目的として建設が行われる。それに先立つ発掘調査は平成６年１月10日より開始された。遺跡内にある園芸施設や建物などの撤去に合わせながら調査が進められたために途中若干の中断期間が設けられた。対象面積は9,871㎡であるが、これまでに調査は園芸試験場事務所跡地分を除いて終了しており、現在残る部分について調査が続行中である。

第１図　遺跡位置図

9．調査の概要

本遺跡は先土器時代、縄文時代を主として遺構・遺物が出土している。先土器時代の石器集中箇所については、６箇所の石器集中箇所のうち出土数230余点を数える箇所も見られ、現在整理作業の途上である。他の時期の所産に関しては遺跡の現況からか、遺物包含層である黒色土層がほぼすべての区域に渡って攪乱されていたため今回の調査では極く僅かなものを検出するにとどまった。なお、本遺跡は平成７年５月中旬から再び調査が行われており、調査終了時にはこれらの数は変動が予想される。

［発見遺構］

旧石器時代：石器集中箇所 6、礫群 3

縄 文 時 代：陥し穴 7、土壙10、ピット群

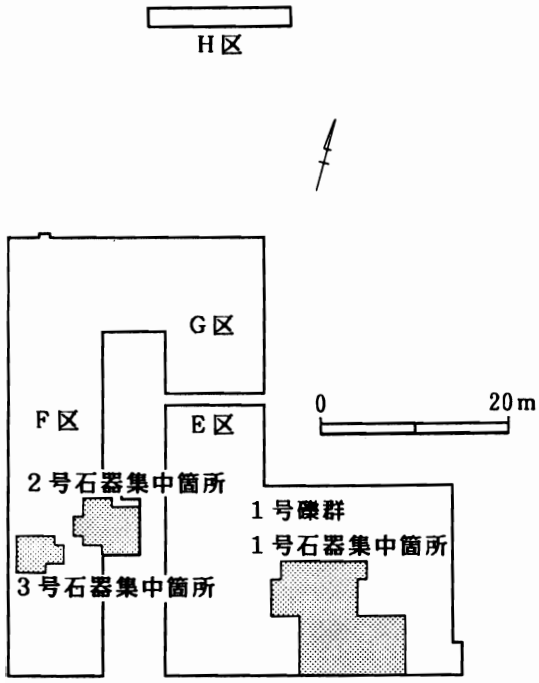
時 期 不 明：溝状遺構72、不明遺構 179

［発見遺物］

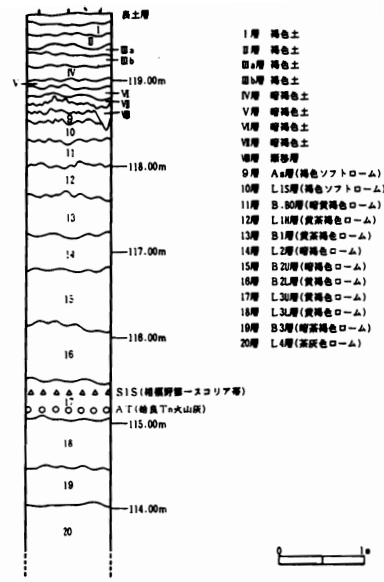
旧石器時代：石器 536、礫 167

縄 文 時 代：土器 183、石器25

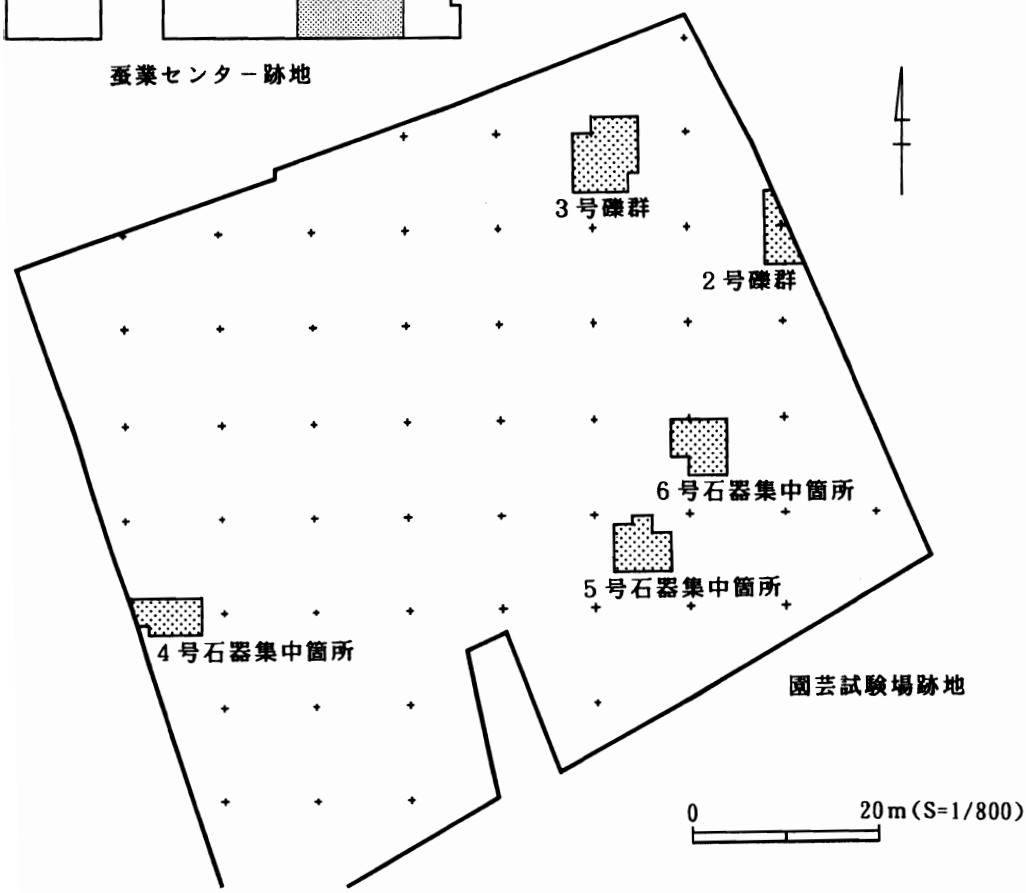
中 ・ 近 世：陶磁器12、鉄製品 3



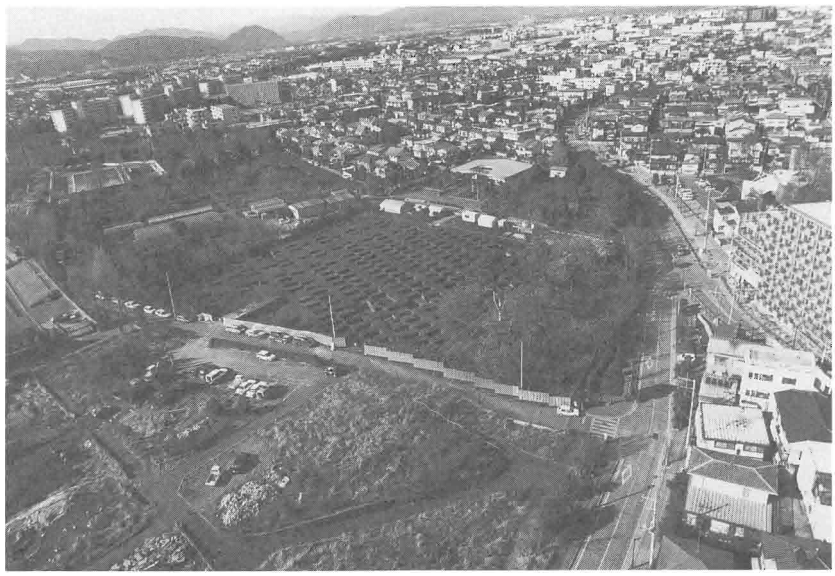
蚕業センター跡地



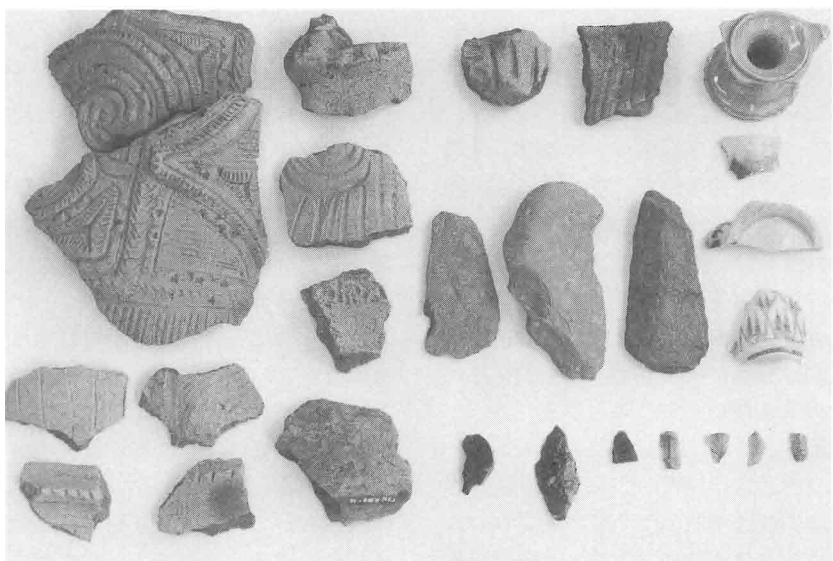
第2図　土層柱状図



第3図　遺構配置図



遺 跡 遠 景



出 土 遺 物

2. 清川村宮ヶ瀬遺跡群北原（№10・11北）遺跡

市川正史・能嶋政義・恩田　勇・冨永樹之

1．所　在　地　愛甲郡清川村大字宮ヶ瀬字北原1,078他

2．調査主体　県立埋蔵文化財センター
（財）かながわ考古学財団

3．調査担当者　市川正史・能嶋政義・恩田勇・冨永樹之

4．調査目的　建設省宮ヶ瀬ダム建設に伴う事前調査

5．調査期間　平成５年８月９日～平成７年３月31日（途中中断期間あり）

6．調査面積　約3,150㎡

7．遺跡の立地

宮ヶ瀬遺跡群は東丹沢の山間に位置し、相模川の支流である中津川によって形成された河成段丘上に展開する。

遺跡群は中津川が早戸川と合流する一帯の落合地区（図１の２）と川弟川との合流付近の平沢・馬場・北原地区（同１）とに大きく二分される。中津川西岸に開ける馬場・北原地区は南北約700ｍ・東西約300ｍを測る宮ヶ瀬でもっとも広大な段丘で、北原（№10・11北）遺跡はその北端に所在し、陽原段丘相当の中位段丘（宮ヶ瀬Ⅱ面）に立地する。新旧の県道を挟んで、遺跡の南東側には段丘先端部の№11遺跡、南西側には段丘裾部の№10遺跡が所在する。№11遺跡は縄文時代後期を主体とする遺構・遺物が数多く発見されており、№10遺跡は小規模ながら平安時代や中世の集落址などが発見されている。これら北原地区の諸遺跡は、行政区画や道路によって便宜的に分けたにすぎず、地形的には一連の遺跡であると判断している。

8．調査の概要

中・近世　約30穴の柱穴からなる掘立柱建物址群１箇所が調査区南西部の一帯で発見された。明確にとらえられた建物址は１棟のみで、規模は２間（約3.6ｍ）×４間（約7.8ｍ）の南北棟で、なかに約２×３ｍの浅い楕円形状の掘り込みが存在する。建物址群からの出土遺物はほとんどなく、所属時期は明確でないが、柱穴は径

図１　遺跡位置図（Ｓ：1／50,000）

20～30㎝の平面方形を主体としており、中世末から近世にかけての所産と考えられる。土坑は約270基発見され、その大半は長軸200㎝前後・短軸40～50㎝を測る長方形で、長軸の著しく長いものである。これら土坑は東西方向を軸に２～４基並列して存在するのが多く、それらが複数まとまって一群をなしている。土坑内からは近世の陶磁器片が稀に出土するだけで、その性格は不明である。

平安時代　調査区中央で竪穴住居址が２軒発見された。Ｈ１号住は竈とは別に、床面中央に宮ヶ瀬遺跡群特有の炉址が設置されているほか、南壁下には焼土を充填したピット、さらに集石が存在するなど特異な施設を有する。Ｈ２号住は床面までの深さが70㎝と深く、東・西・南壁上には意図的に埋め戻すための掘り込みが認められた。掘立柱建物址も調査区中央で２棟発見されている。Ｈ１号掘立は平面方形の小規模な柱穴19穴からなる３間（約５ｍ）×３間（約6.5ｍ）の総柱式の建物址で、北東部のみ柱穴を欠き２×２間の空間を造っている。土師器片が若干出土しただけで所属時期は明確でないが、覆土からＨ１号住より新しいと判断している。Ｈ２号掘立はＨ１号住の北東約４ｍに位置する。

規模は２間（約3.6ｍ）×３間（約3.8ｍ）の東西棟で、桁行の柱は各々２穴が溝で連結した「溝持ち」である。主軸方向や位置関係からみてＨ１号住と一体となって機能したものと考えられる。土坑は107基あり、その大半が径１ｍ前後の円形土坑で、残る５基が平面方形を呈する。いずれも調査区西半部に集中する。土壙墓はＨ１号掘立の南西約３ｍに所在する。長軸約2.1ｍ・短軸約0.95ｍの舟形とも呼べる形状である。深さは約50㎝で、断面形も先端部の傾斜が緩やかで、これも舟形状をなす。底面上からは人骨や骨粉が多く出土しており、南西側に遺体を横向きにした屈葬であったと推定される。長さ30㎝ほどの鉄製の小刀１点が副葬されているのみで、所属時期は不明だが、円形土坑より新しく、また覆土の状況や主軸方向などからＨ１号掘立と時間的に相前後したものと考られる。

縄文時代　竪穴住居址は調査区中央から北寄りに３軒、南端にＪ１号敷石住居址を囲むように３軒の計６軒が発見されている。平面形は径3.5ｍ前後の円形が主体で、Ｊ１号住のみ長径4.5ｍ程の隅丸方形を呈する。壁高は30～40㎝を測る。Ｊ６号住が地床炉のほかは、いずれも石囲炉である。炉の周囲には柱穴が巡っており、Ｊ１号住では周溝も認められている。埋甕は２軒で発見されており、Ｊ２号住では北東側に２個並んで、Ｊ３号住では北側に１個認められた。これら埋甕の位置から、住居の入口部が斜面谷側に設けられていたことが知れる。遺物は各住居址とも少ないものの、炉址内からはややまとまって土器が出土しており、それらからＪ１号住が中期後半の曽利式・加曽利Ｅ式前葉、Ｊ２～５号住が曽利Ⅲ・Ⅳ式・加曽利Ｅ３式期に、Ｊ６号住は曽利Ⅴ式・加曽利Ｅ４式期に所属するものとみられる。石器では磨石や敲石が各住居址から出土しており、他に打製石斧・用途不明の大型礫が少数認められている。

敷石住居址は調査区の南端で１軒発見されている。遺存状態は良好で、長軸約4.9ｍ・短軸約3.9ｍの楕円形で、深さ60㎝ほどの掘り込みの中に柄鏡型に敷石を配している。敷石の主体部は長軸約3.0ｍ・短軸約2.5ｍの隅丸長方形で周囲に縁石を巡らし、中央に石囲炉を設置している。入口部は長軸約2.2ｍ・幅0.7ｍで両側に石を立てているが、大半は内側へ倒れかけている。石を敷いているのは主体部との付け根部分のみで、立石の間には小礫が散るだけで、意図的に石を敷いた形跡はなく、また埋甕の設置も認められなかった。主体部の覆土下層は炭・焼土の混じった土層で、敷石の石も火熱を受けており、本住居は火災に遭った可能性もある。本来、住居の掘り込みは主体部の縁石や入口部の立石に沿って柄鏡型を呈するのが一般的と考えられるが、壁の検出にあたり、主体部を覆っていた土層と同一ではなかったものの、炭を混入し、さらに土器片が多く出土することから地山が出るまで掘り続け、結果、主体部より一回り大きく、また入口部周辺では広い空間部をもった掘り込みとなっている。遺物は中期末の曽利Ⅴ式・加曽利Ｅ４式が主体で、主体部や入口部の内外から大量に出土したものの、敷石面上では注口土器の大破片など若干量があるにすぎない。石器では磨石のほか石皿・石鏃などが僅少ある。敷石下部では、縁石の外側を全周するように、大小の柱穴が巡り、入口付け根部には平行して溝状の対ピットが確認されたが、空間部および住居址周辺部に柱穴は発見されなかった。

このほか中期の遺構としては集石やピット群・焼土址・炉址などがあり、これらのうち焼土址は各住居址の周辺に多く分布する。土坑は18基で、その多くはローム面上で確認した陥し穴状の土坑である。時期的には中期から早期末まで遡るものである。これらのなかには覆土上面に焼土址の築かれている例が３例認められた。いずれも良好な焼土層が堆積しており、なかには石囲炉の様相を呈しているもの、また中期前半の勝坂３式の深鉢形土器大片と石匙１点が出土したものもある。このように、別々の機能を有した遺構が３例も発見されたということは、偶然の結果とは思えず、土坑は完全に埋まりきらず、窪地となって残っており、それを利用して中期の人々が火を焚いたと考えるのが妥当かと思われる。

遺物は遺構の内外をとわず、調査区南東部に集中して出土しており、整理箱で80箱ほどある。その大半は中期後半の土器で占められ、このほ

かに中期前半および後期前半の土器が少量含まれる。石器では磨石や凹石が多く、ほかに打製石斧・磨製石斧・石皿などが少量あり、後期の遺跡で顕著だった石錘はごく僅かである。

先土器時代　調査区北部のL1S層中位スコリア層（Y139）直上から土器を伴う槍先形尖頭器製作に係わる石器集中地点が検出された。

集中地点は東西約16m・南北約8mの範囲に弧状の分布を示し、調査時の所見では概ね5つのブロックから構成される状況が窺えた。

出土遺物約1150点の内訳は、無文土器胴部小破片（13点）・槍先形尖頭器（未製品含む・27点）・掻器（6点）・削器（3点）・礫器（1点）・敲石・台石・石核などのほか、多量の剥片・砕片からなり、焼礫も少量含まれている。土器は第4ブロックの一角から石器類と供に検出されたもので、胎土に繊維状の物質が含まれている。槍先形尖頭器は長さ4～10cm程度の小型のものが大半で、緻密黒色安山岩・硬質細粒凝灰岩・黒曜石等の石材が用いられている。

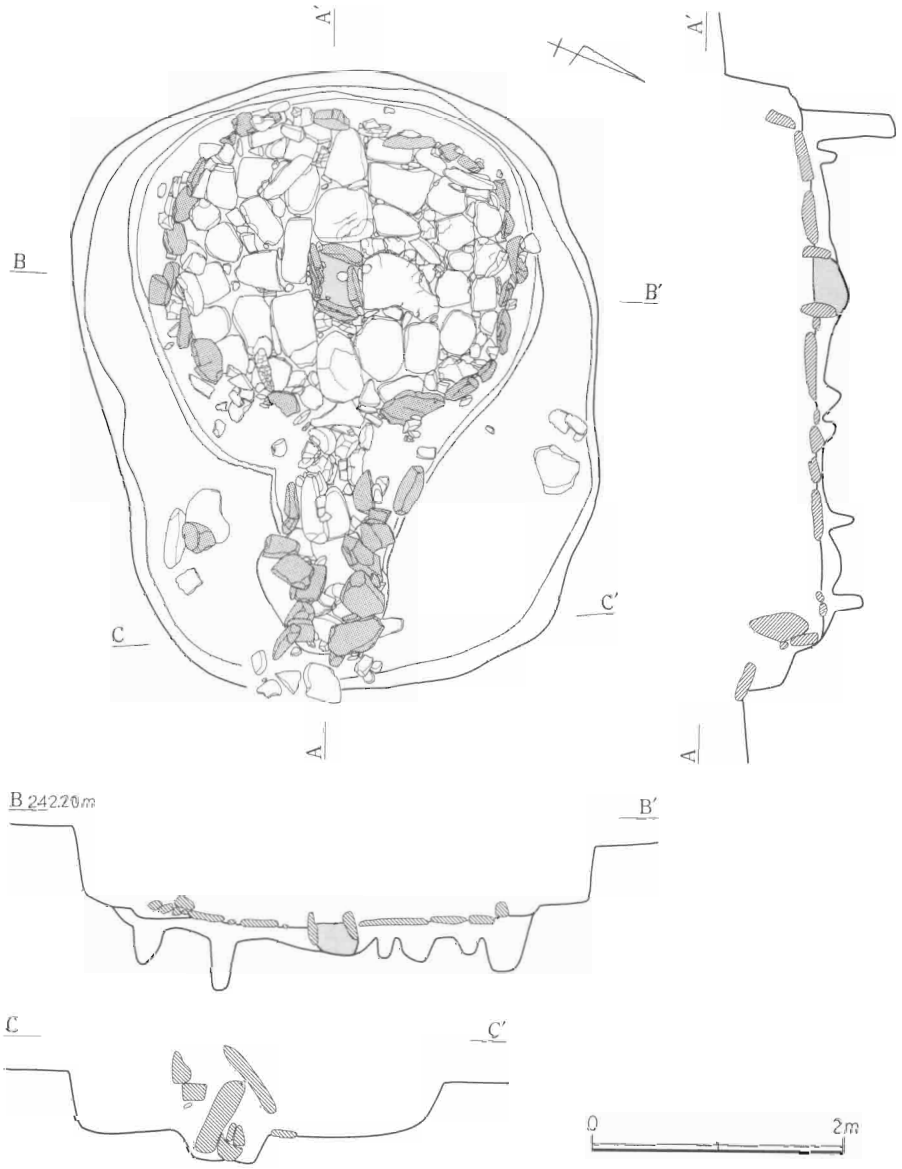


図2　J1号敷石住居址

9．ま　と　め

本遺跡では、中・近世と平安時代・縄文時代・先土器時代の遺構・遺物が発見された。

平安時代では、総柱式の掘立柱建物址とそれに伴うとみられる舟形の土壙墓が注目される。

縄文時代では、本遺跡が北原地区で唯一の中期の集落址であることが判明した。竪穴住居址と敷石住居址はいずれも中期後半に所属するものであるが、年代が下降するにつれ、住居の分布域が調査区の南へ移っていくことも明らかとなった。敷石住居址は入口部に立石を伴うということのみならず、敷石部分を取巻くように一回り大きな掘り込みのなされていることが留意される。これが敷石を設置するための掘り方なのか、空間として機能していたかについては、今後、検討を加えて明らかにしていきたい。

先土器時代では、L1S層中位から本遺跡群としては初出の土器を伴出する石器集中地点が検出された。槍先形尖頭器の製作に係わる内容を示すとともに、最古級の部類に属する土器の伴出があり、今後慎重な分析を加えていきたい。

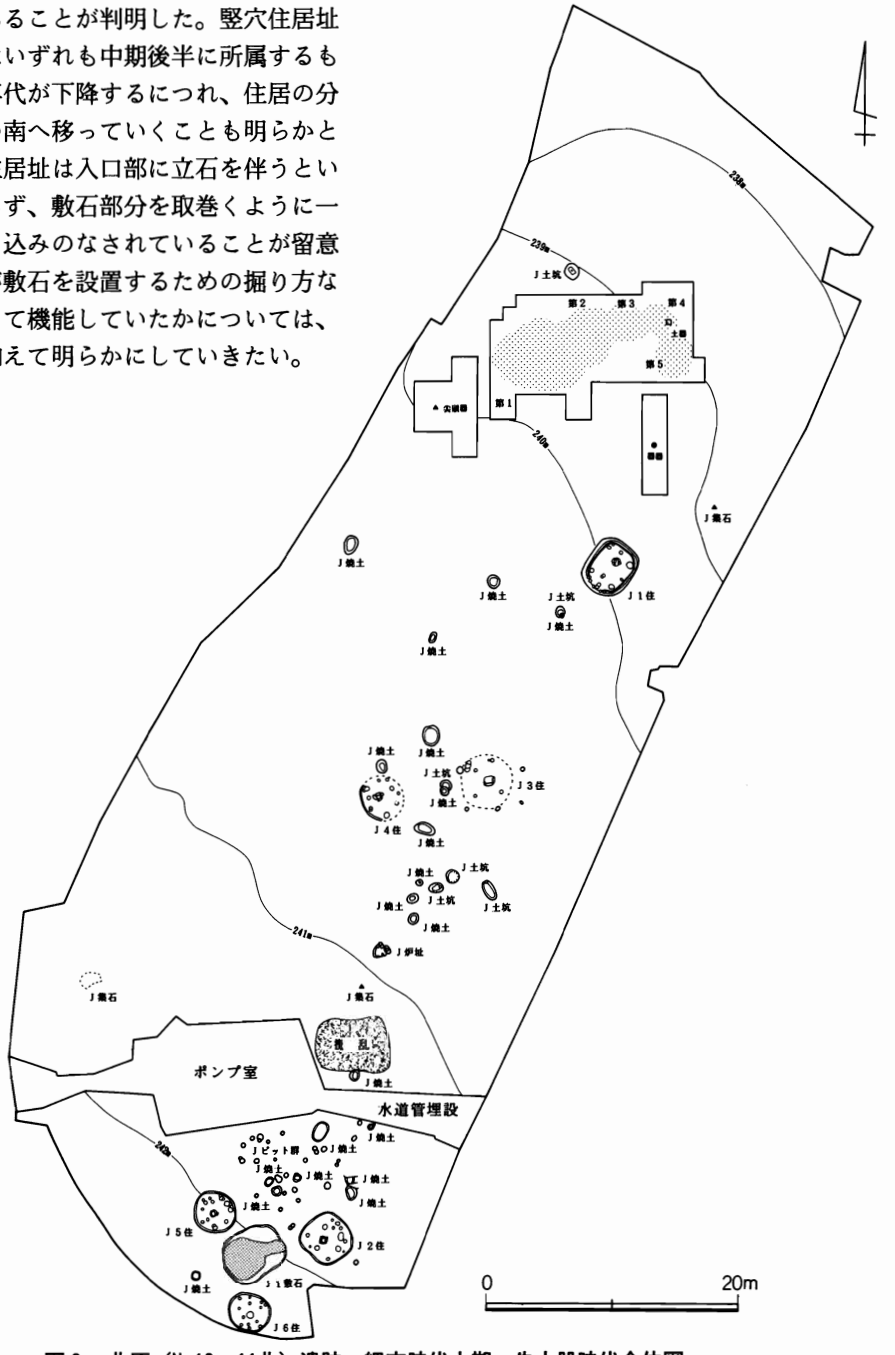


図3　北原（No.10・11北）遺跡　縄文時代中期・先土器時代全体図

3. 横浜市阿久和宮腰遺跡（一次調査）

戸田哲也・中山　良

1．所　在　地　横浜市瀬谷区阿久和町4293他
2．調査主体　阿久和宮腰遺跡発掘調査団
3．調査担当者　戸田哲也・相原俊夫・秋山重美・中山良・中村哲也
4．調査目的　阿久和土地区画整理事業に伴う事前調査
5．調査期間　試掘調査　1993年12月1日～1994年2月28日
一次調査　1994年6月1日～1995年3月31日
二次調査　1995年4月1日～現在調査継続中
6．調査面積　約5000㎡

7．遺跡の立地

阿久和宮腰（あくわみやのこし）遺跡は横浜市西部の瀬谷区阿久和町に所在し、相模鉄道三ツ境駅から北へ約2㎞に位置する。地形的には相模原段丘の東側端部にあたり、柏尾川支流の阿久和川と境川支流の和泉川にはさまれている。遺跡は阿久和川右岸の段丘上にあり、標高約62ｍを測る。河川との比高差は約20ｍである。周辺の主な遺跡としては、縄文時代中期の集落址とみられる「阿久和蟹沢遺跡」が南西約1.3㎞、同じく中期から後期にかけての集落址と考えられる「大久保原遺跡」が南方約1.3㎞に存在する。また、本遺跡とほぼ同時期の環状集落址が発見された「泉警察遺跡」が南西約 2.5㎞に位置じている。

8．調査の経緯

今回の調査は阿久和土地区画整理事業に伴い実施された発掘調査である。本調査に先立ち横浜市教育委員会による範囲確認調査が実施され、その結果をうけ調査団は事業区域北半分を対象とする試掘調査を行った。これによって縄文時代中期の集落址の存在が確認された。その後の協議により調査対象区域が設定され、発掘調査を実施するはこびとなり、対象区域を南北に2分割して年度別に行うこととなった。1994年度は一次調査として北側約5000㎡について実施し、南側の約3000㎡は現在調査を継続中である。

9．調査の概要

一次調査において検出した遺構と遺物はすべて縄文時代に属し、早期後半の炉穴や陥し穴土坑と中期の勝坂期から加曾利Ｅ期にかけての集落址にかかわるものである。

今次の調査によって発見された縄文時代中期の集落址は二次調査区域にも広がっており、その構成については不明な部分がある。

以下、発見された遺構と遺物について列記し、主に縄文時代中期の集落址について説明を加えることにする。なお、下記の所見は一次調査終了時の1995年3月31日現在のものである。

＜縄文時代早期＞

－遺　構－

炉穴6群・陥し穴土坑6基

－遺　物－

条痕文系土器

剝片等

＜縄文時代中期＞

－遺　構－

竪穴住居址 161軒・土坑 265基・集石址7基・埋設土器8基

－遺　物－

勝坂3式土器・加曾利Ｅ1～Ｅ4式土器

土偶・耳飾り・土鈴・土錘・円盤状土製品・ミニチュア土器等

打製石斧・磨製石斧・石鏃・磨石・石皿・敲石・凹石・石錐・スクレイパー

硬玉製大珠・垂飾品・軽石製品等

阿久和宮腰遺跡の縄文中期の集落址を土器の編年型式からみると、勝坂3式・加曾利Ｅ1 式からＥ4式の各期におよんでいる。

基本土層については、第Ⅰ層が表土（耕作土）で、第Ⅱ層は黒褐色のスコリア主体土層である。第Ⅲ層は暗褐色土層で、層相の違いによってさらにａ・ｂ・ｃ層に細分される。このうちⅢｂ層が縄文時代中期の包含層および遺構の掘り込み面で、Ⅲｃ層は早期の包含層で炉穴や陥し穴土坑を検出している。

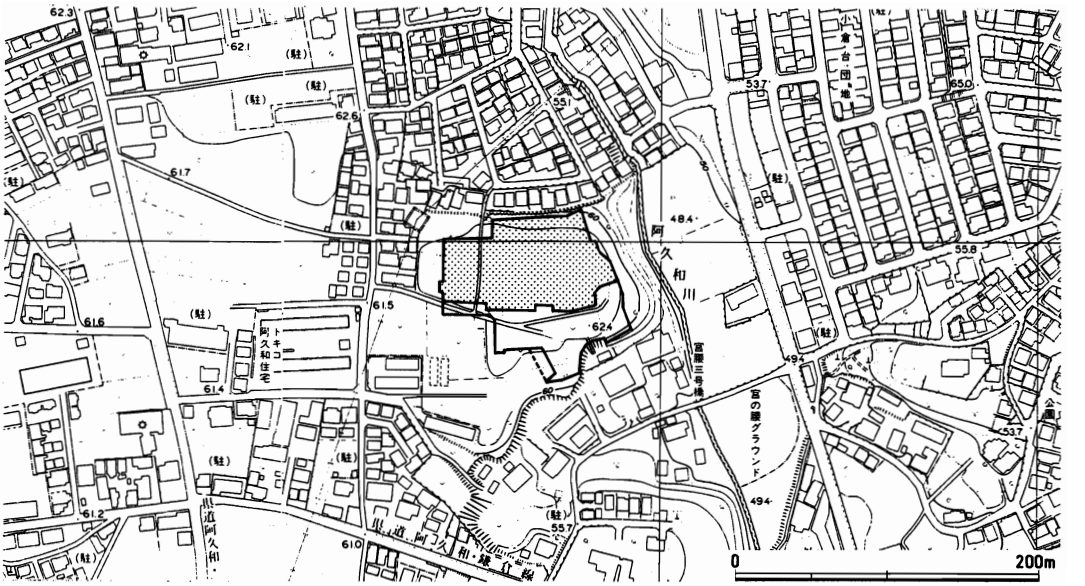


図1　遺跡の位置　（1：5000）

以下では、土器型式によって区分される集落址の変遷を概観することとする。

勝坂３式期の竪穴住居址は約40軒を検出している。集落は住居址分布からみて、楕円形を呈すると想定される。規模は二次調査区におよび、長径（北東－南西）110ｍ前後、短径約80ｍと推定される。住居址は調査区北側から南西側では弧状に分布し、東側では他の時期の住居址と重複し散在している。

住居址の平面形は円形ないし楕円形を呈している。主柱穴をもって周溝が全周するものと、主柱穴および壁柱穴で構成されるものとがある。炉址は地床炉・埋甕炉・石囲い埋甕炉の３種類がみられる。土坑は当該期の遺物を出土した例が約10基確認されている。このうち南側に位置する３基には完形土器がみられた。土坑は住居址群の内側にそって分布している。大きさは径１ｍから1.2ｍ前後で、円形ないし隅丸長方形を呈している。

加曽利Ｅ１式期の竪穴住居址は６軒が発見され、前段階に較べるとかなり住居址数が減少している。住居址は調査区北側から南西側にかけて弧状に分布し、勝坂３式期の住居址と重複するものが多い。

住居址の平面形はすべて円形を呈し、いずれも周溝がめぐっている。規模は、長径３ｍから４ｍ程度の小さいものが多い。炉址は、ほとんどが埋甕炉である。土坑は当該期の遺物を伴出した例がなく不明である。

加曽利Ｅ２式期の竪穴住居址は約35軒を検出している。集落は南側に住居址の分布がみられない「馬蹄形」を呈している。規模は南－北約55ｍ、東－西65ｍを測る。

住居址の平面形は円形ないし楕円形を呈している。周溝は全周するものとめぐらないものとがある。炉址は地床炉・埋甕炉・石囲い炉の３種類がみられる。この時期から本遺跡では埋甕が発生し、高い割合で住居に埋設している。土坑は、当該期の遺物を出土した例が10基確認されている。これらは住居址群の内側にそって散在し、多くは北東から南にかけて弧状に分布している。土坑の平面形は隅丸長方形および円形で、大きさは径１ｍから1.5ｍほどを測る。南側からみいだされたものには完形土器や大形破片が出土した例が５基みられる。

加曽利Ｅ３式期の竪穴住居址は約70軒が発見されている。住居址群は円形に配置し、土坑や集石とともに環状集落を構成している。規模は径約65ｍを測る。加曽利Ｅ２式期の集落を継承するように集落はきずかれている。

住居址の平面形は、円形ないし楕円形を呈するものが主体的で、隅丸方形や五角形のものも

みられる。ほとんどの住居址には周溝がめぐり、いずれも埋甕をもっている。また、住居址は埋甕部分に小さな張り出しをもつ例がある。炉址は石囲い炉が主体的であるが、石囲い埋甕炉もみられる。土坑は当該期の遺物を出土したものが、約50基確認されている。多くは住居址群の内側にそって分布し、西側ではやや希薄である。土坑の平面形は隅丸長方形および円形である。大きさは径１ｍから1.7ｍ前後を測る。このうち、20基からは完形土器や大形破片が出土し、打製石斧や磨製石斧、石皿や石匙などの石器も検出している。集落の西側から集石址７基を検出してたが時期が判明したものは加曾利Ｅ３式期の１基のみである。また、当該期の埋設土器は環状集落の外縁東側に３基まとまって発見されている。

加曾利Ｅ４式期の竪穴住居址は約10軒を検出したが、前段階に較べるとその数は著しく減少している。住居址の分布は散在するものの前段階のものとすべて重複している。集落構成のうえでは、前段階から継続しているようにみえる。

住居址の平面形は柄鏡形を呈するが、いずれも掘り込みが浅いため不明なものもある。柱穴はいずれも壁柱穴がめぐるタイプである。炉址は石囲い炉・埋甕炉・石囲い埋甕炉の３種類がみられる。張り出し部には埋甕をもっている。土坑は、当該期の遺物を出土例が14基確認されている。これらは住居址の内側にそって散在しており、多くは東から南にかけて弧状に分布している。完形土器や大形破片を出土した例が７基みられた。土坑の平面形は隅丸長方形および円形を呈している。大きさは径１ｍ前後と小形である。また、埋設土器が集落の北側に５基まとまって発見されている。

10. ま と め

阿久和宮腰遺跡の縄文集落は、中期中葉の勝坂３式期に形成され、加曾利Ｅ１式期に継続して展開している。この時期の集落は北東から南西を長径とする楕円形を呈し、長径は100ｍを越すと考えられる。当該段階から竪穴住居址は環状に配置され、その内側には墓壙と推定される土坑が認められる。

中期後葉の加曾利Ｅ２式期になると前段階の集落の内側に径65ｍほどの馬蹄形を呈する集落が形成され、集落の位置と住居の配置に変化がみられる。つづく加曾利Ｅ３式期にはさらに住居址数が増加している。集落の位置や住居の配置は加曾利Ｅ２式期から継続されているが、円形を呈する環状集落となっている。この加曾利Ｅ２・Ｅ３式期の段階には住居址数が著しく増加し、阿久和宮腰縄文集落のピークと呼べる段階をむかえる。また、住居址内に埋甕を埋設するようになり一般化する。なお、加曾利Ｅ３式期には、住居址出入口方向に小さな張り出しをもつ例があらわれ、住居形態にも変化が生じている。集落は重複しあう住居址群とその内側に分布する土坑、集石址や埋設土器によって構成されている。

中期終末の加曾利Ｅ４式期になると、住居址数は急激に減少し、集落は衰退しその後の継続を絶ってしまう。住居址は柄鏡形を呈するようになり、住居形態に変化がみられる。

こうした集落変遷のあり方は、神奈川県域を含めた関東・中部地域の縄文集落例と共通する傾向を示している。縄文中期集落の典型例として、阿久和宮腰縄文集落を新たに加えることができよう。現在発掘を継続中の南側の調査により、完成された環状集落の様相が明らかになるものと考えられる。

阿久和宮腰遺跡全景（上空から）

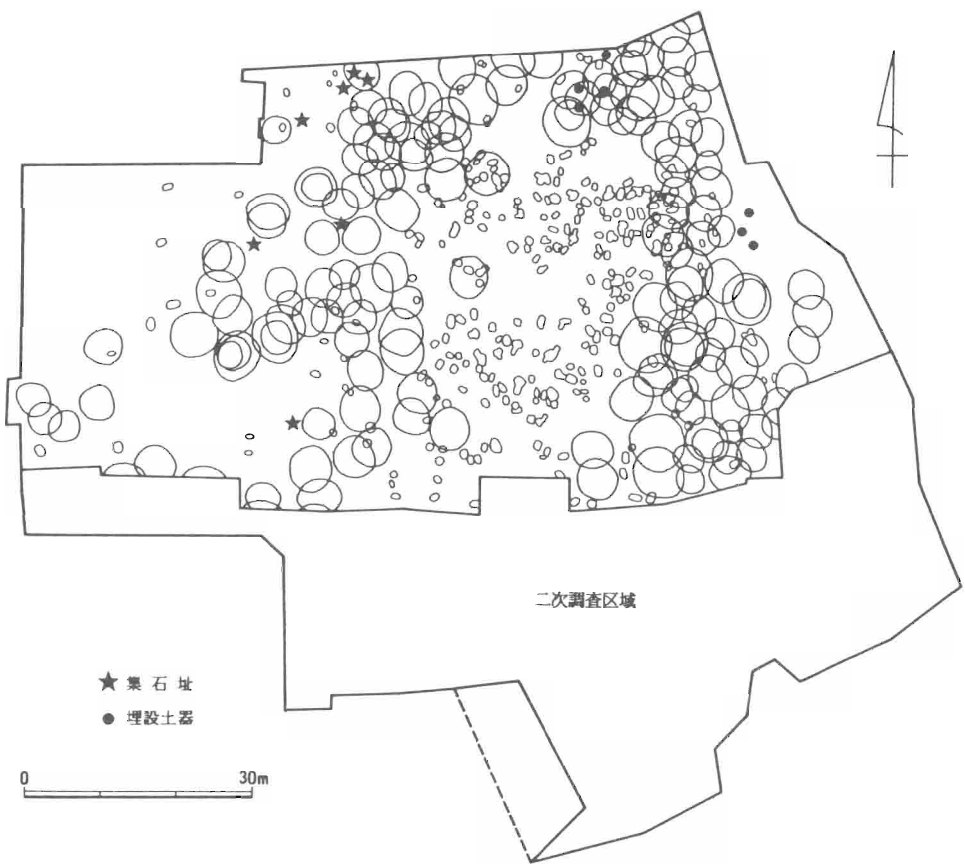


図２　阿久和宮腰遺跡遺構図（1：1000）

4.　三浦市油壺遺跡

須田　英一

1．所　在　地　三浦市三崎町小網代字戸張1,201-2・1,201-3

2．調査主体者　油壺遺跡発掘調査団

3．調査担当者　須田英一

4．調 査 目 的　個人専用住宅建設工事に伴う記録保存調査

5．調 査 期 間　平成7年2月6日～3月22日

6．調 査 面 積　約250㎡

7．遺跡の立地

遺跡は小網代湾と油壺湾に挟まれた標高約30mを測る、東から西へ突き出した相模湾に望む平坦な細長い台地上に位置する。この台地は、三浦道寸が討ち死にした場所として知られる新井城跡でもある。県道油壺線の北側に面し、西側は油壺マリンパーク第三駐車場と近接している。

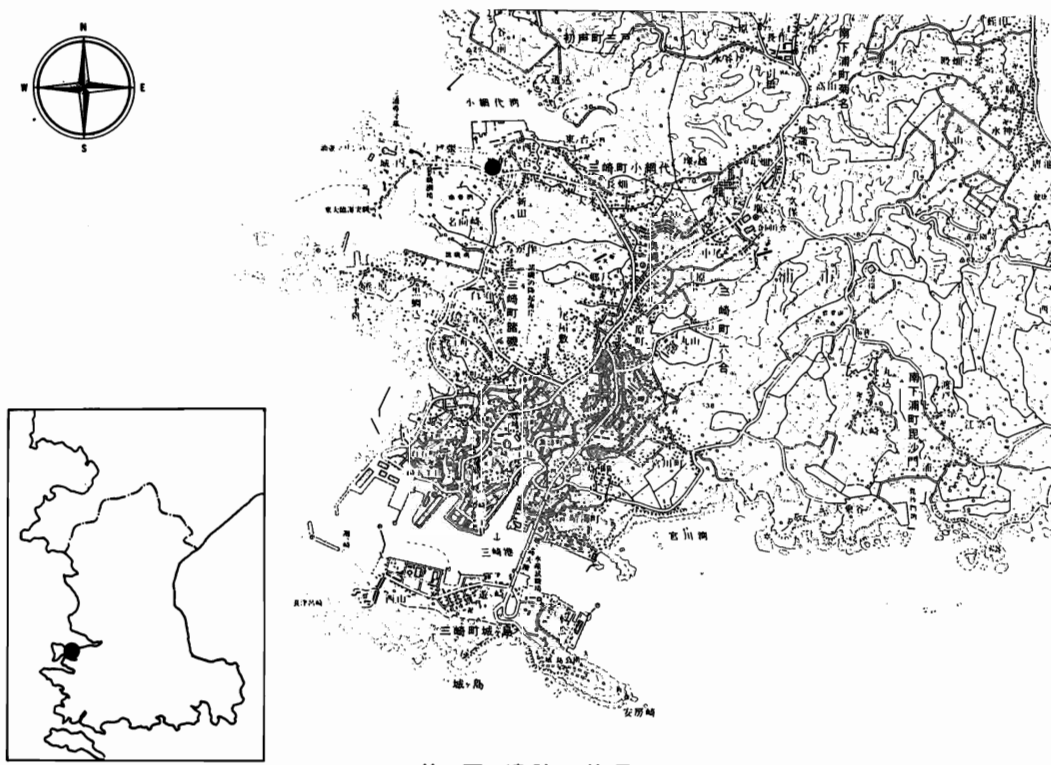
遺跡の西側には、縄文時代早期の標式遺跡である鵜ケ島台遺跡が隣接している。周辺の遺跡としては、遺跡北側に広がる小網代湾を隔てた対岸に縄文時代早期の標式遺跡である三戸遺跡が位置する。一方、遺跡南側の油壺湾を隔てた台地上には縄文時代前期の標式遺跡である諸磯遺跡が位置している。

遺跡周辺は、油壺マリンパークやヨットハーバー等が建設されると共に、宅地開発の波が押し寄せている。

8．調査の経緯

当該地は三浦市遺跡分布地図の№47遺跡として周知されている油壺遺跡の一部に当たる。鵜ケ島台遺跡に隣接し、昭和34年の発掘調査（三浦市教育委員会1959）において縄文時代の遺物、古墳時代の遺構・遺物が発見されている地点にも近接している。

個人専用住宅建設に伴い、平成6年12月に三浦市教育委員会により試掘調査が実施された結果、縄文時代中期後葉加曽利E式及び曽利式期



第1図　遺跡の位置

土器を伴う竪穴住居址が検出された。また、古墳時代前期の遺物も出土し、該期の遺構の存在も予想された。このため、調査団を組織し、本格調査が実施されることなった。

9．調査の概要

調査により検出された遺構を、各時代ごとにまとめると以下のようである。

（縄文時代）

竪穴住居址	4軒
柄鏡形住居址	1軒
石囲炉	1基

（古墳時代前期）

竪穴住居址	5軒
炉址	3基

（近世以降）

溝址	3条

特に注目しておきたいのは第10号住居址とした柄鏡形住居址の検出である。長楕円形の竪穴内に柄鏡形住居址が構築されるという形態をとっている。床面には円盤状を呈した礫を壁に向かい斜めに円形に配し、隙間にくさび状に小型礫をうがっている。また、柄部には長さ60cm、幅40cm、厚さ15cmの大型の板状の礫が敷かれている。埋甕は主体部と柄部の連結部（加曽利ＥＶ式)、柄部先端に設けられている。竪穴内に柄鏡形住居址が構築される類似した遺構として、平塚市王子ノ台遺跡Ｊ－11号住居址、愛甲郡清川村宮ケ瀬遺跡群馬場（№６）遺跡Ｊ－２号住居址が挙げられる。

次に、主な出土遺物を各時代ごとに記すと以下のようになる。

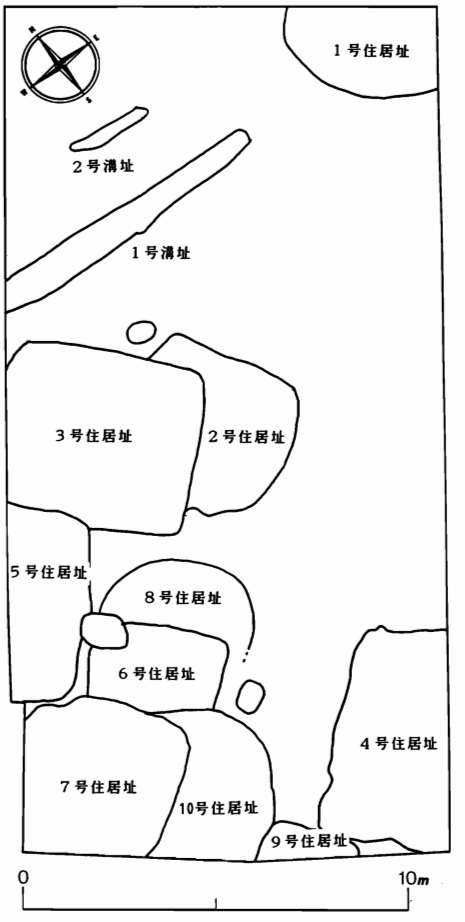
（縄文時代）

縄文式土器	コンテナ10箱
各種石器類	数十点
翡翠大珠	1点
土器片錘	数十点
土製円盤	数十点

（古墳時代前期）

土師器	コンテナ10箱

ここで特筆すべきは、柄鏡形住居址床面より出土した翡翠大珠であろう。この他、土器片錘・土製円盤が多く出土している。石器では黒曜石製の石鏃が多数出土し、黒曜石製の剝片・砕片の出土が多い点も特徴的である。また、古墳時代では、第５号住居址よりやす状の鉄製品が出土しており、土錘と共に漁撈活動が活発に行われていたことが窺える。



第２図　遺構分布　（1：200）

10．ま　と　め

以上、紙面の関係で調査内容について意を尽くすことができなかったが、現在整理作業中でもあり、詳細については本報告書に譲ることとしたい。

2 号 住 居 址

4 号 住 居 址 埋 甕

10号住居址大珠出土状況

10 号 住 居 址

10 号 住 居 址

5. 藤沢市若尾山遺跡

継　　実

1．所　在　地　藤沢市朝日町３－３
2．調査主体者　藤沢市立大道小学校内遺跡発掘調査団
3．調査担当者　継　実
4．調 査 目 的　小学校舎増築に伴う事前調査
5．調 査 期 間　平成５年６月１日～平成６年４月３日
6．調 査 面 積　約2,400㎡

7．遺跡の立地

本遺跡はJR，小田急，江ノ電が乗り合わせる藤沢駅の東方約300ｍにある藤沢市役所に東隣する。遺跡地のすぐ東側には、藤沢市東部を縦断する境川が流れており、この境川は遺跡地から約400ｍ南下した地点で東から流れてくる柏尾川と合流する。藤沢市南部域は、大磯から片瀬に至る湘南砂丘と呼ばれる砂丘地帯が形成されており、本遺跡はこの砂丘上に立地する。標高は約10ｍ。

本遺跡の周辺をはじめとする藤沢市南部域は、藤沢市北部の台地上に比べて未だ発掘調査例の少ない地域であるが、境川左岸域に面した片瀬丘陵崖面には古くから川名新林横穴群をはじめとする横穴墓の存在が知られているほか、横穴群する弥生～平安時代の遺跡である片瀬大源太遺跡などが知られている。

8．調査の概要

調査は、平成５年６月１日に着手した。現地表下約50㎝までは灰色の純砂層が堆積しており、これを重機によって除去した。その下には黄色の純砂層が堆積していたが、これは無遺物層であった為これも重機によって除去した。その下に堆積する暗褐色砂質土は、弥生～平安時代の遺物を多量に含む遺物包含層であったが、この層中を切り込む遺構は存在せず、この下のやや砂分の多い暗褐色砂質土上で弥生～平安時代の遺構を確認した。尚、前述した遺物包含層であるが、遺跡地の西隣の現藤沢市役所用地はかつて小高い丘であったといい、この丘上から流れ込んだ遺物が包含層を形成するものと考えている。

調査により検出した遺構は以下のとおりである。

・縄文時代：集石遺構１基（前期）
・弥生時代：方形周溝墓７基以上（中期）
　　竪穴住居跡１軒（中期）
・弥生時代末～古墳時代前期：祭祀遺構１箇所
　　竪穴住居跡17軒
・奈良～平安時代：竪穴住居跡８軒
　　溝３条
　　土塁状遺構１基
・平安時代以降：堀立柱建物跡４棟以上
　　土坑４基
　　柱穴約50基

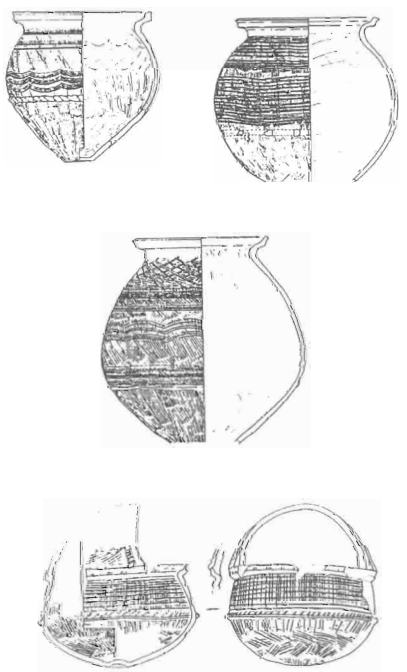
地山も遺構の覆土も砂で性質に大差なく、また過去の大地震により遺構が崩れたまま埋まっているなどで遺構の把握には困難を究めた。検出された遺構については、弥生～古墳時代前期の竪穴住居跡に於いて炉跡・柱穴が検出されなかった。遺物の出土傾向としては、前述したように遺構確認面上層の遺物包含層中からのものが大半を占め、遺構中からのものとしては方形周溝墓中から壺・瓶などがまとまって出土したほかは質・量ともに貧弱である。主要な出土遺物は以下のとおりである。

・縄文時代：深鉢３個体分・石錘（前期か）
　　中期勝坂式深鉢片
・弥生時代：宮の台式期の壺，瓶を筆頭に中～後期の土器片多数（近江系受口状口縁甕、東海系手焙形土器・磨製石斧・石錘
・古墳時代：銅環・銅鏃・鉄製紡錘車・土師器・須恵器
・奈良，平安時代：土師器・須恵器・瓦片

9．ま　と　め

調査の成果を古い時代から順に述べると、次のようになる。まず、砂丘遺跡では市内で初めて縄文時代前期の深鉢が完形で出土した点。藤沢市内での砂丘地帯からの縄文遺物の出土は、

今までに片瀬大源太遺跡でわずかに晩期の遺物が出土したのみである。前期の段階で砂丘上に微高地が形成され遺構が存在するという事実は、今後、縄文期の海進・海退の時期的な問題も含め、当該期の縄文人の砂丘地帯への進出を考える点で貴重な資料といえる。次に弥生時代中期の方形周溝墓群の検出から、遺跡地周辺は当該期には墓域であったことが判明した。調査区の南西で１軒のみ該期の竪穴住居が検出されており、墓域との関係が注目される。弥生時代末期の祭祀遺構から出土した一群の近江及び東海系の土器は当該期の西方との直接的な交渉を物語る貴重な資料である。と同時に、１点のみ出土した北関東系（十王台か）の小壺の存在は、西方からの一方的な文化の流れだけでは捉えられないこの時期の複雑な情勢を物語る。奈良～平安時代の土師器を伴う大型の掘立柱建物跡群は軸方位を同じくし、奈良時代以降のある時期に大規模な建物群が存在したことを推察させる。



北村尚子氏作成

図1　祭祀遺構出土遺物

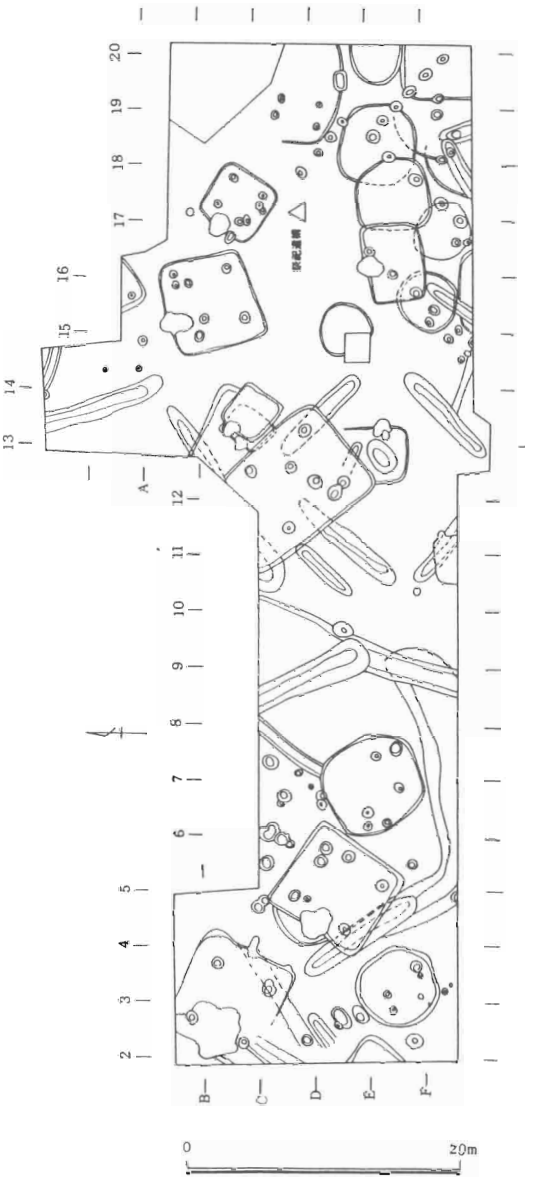


図2　調査全図

写真１　祭祀遺構出土の近江系受口状口縁甕

写真２　周溝内出土の土器群（弥生中期）

6. 第一東海自動車道 №14（三ノ宮・下谷戸）遺跡

宍戸信悟・飯田純友・宮坂淳一・櫻井真貴・三瓶裕司・畠中俊明

1．所　在　地　伊勢原市三ノ宮1,100他
2．調査主体者　(財)かながわ考古学財団
3．調査担当者　宍戸信悟・飯田純友・宮坂淳一・櫻井真貴・三瓶裕司・畠中俊明
4．調査　目的　第一東海自動車道改築に伴う事前調査
5．調査　期間　平成6年11月9日～平成7年9月30日（予定）
6．調査　面積　1,840㎡(平成7年度分)
7．遺跡の立地

本遺跡は伊勢原市の中央部、小田急線伊勢原駅より北へ約2㎞の所に位置する。伊勢原台地の西端、丹沢山塊から南東方向に派生した細長い台地上に立地している。標高は50～54m前後である。台地の南西側に沿って鈴川が蛇行しながら流れている。また北東側は、浅い谷が広がっているが、これまでの調査によって旧河道が複雑に入り乱れ、礫を主体とする河原が広がっていることが判っている。

本遺跡は、第一東海自動車道(通称東名高速道路)の建築に先立って三ノ宮・下谷戸配石遺構群及び三ノ宮3号墳として、縄紋時代後期の敷石住居址や古墳時代後期の横穴式石室を持つ円墳などが調査されている。

8．調査の概要

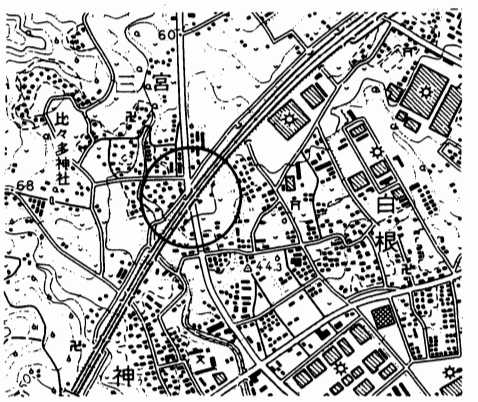
本遺跡の調査は、平成2年度より神奈川県立埋蔵文化財センターが第一東海自動車道改築に伴う事前調査として実施してきたが、平成6年度よりかながわ考古学財団が業務移管を受けて発掘調査を行っている。

なお、昨年の第18回発表会において本遺跡の縄紋時代草創期の石器製作址について報告しているが、今回はその後に発見された古墳時代後期の古墳群について報告する。

本遺跡の調査は、本線両側拡幅部分と新設側道部分を対象とするもので、対象面積は全体で9,280㎡である。

発見された遺構

本遺跡は旧石器時代から近世に及ぶ複合遺跡であり、多数の遺構・遺物が発見されているが、ここではその概略を述べておく。旧石器時代では細石刃石器群の遺物集中地点が、縄紋時代では草創期の有舌尖頭器の遺物集中地点が10箇所確認されている。また縄紋時代後期の集落が発見され、竪穴住居址2軒、敷石住居址5軒、環礫方形配石遺構2基、配石遺構5基などが発見されている。弥生時代末～古墳時代にかけては、集落址と方形周溝墓群、古墳群が調査区域全域で発見されている。これまでに発見されたのは、竪穴住居址21軒、掘立柱建物址2棟、方形周溝墓11基、円墳7基、小石室7基、土坑墓1基、土坑5基などがある。住居址群は上り線東側から下り線全域にかけて発見されているが、方形周溝墓群は上り線西側に集中して確認され、さらに調査区北側に広がっている。中世～近世にかけては、台地上西側の上り線で屋敷跡の一部が発見された。東側の台地上から谷部にかけては、区画溝や水路と推定される溝状遺構、段切り状遺構、道状遺構、護岸状施設、宝永スコリアの堆積した耕作址等が多数が発見された。

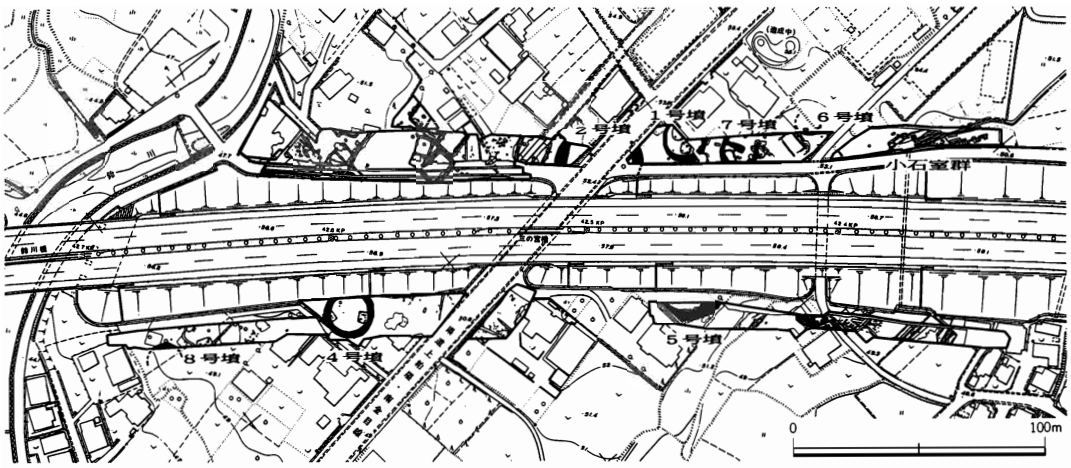


第1図　遺跡位置図

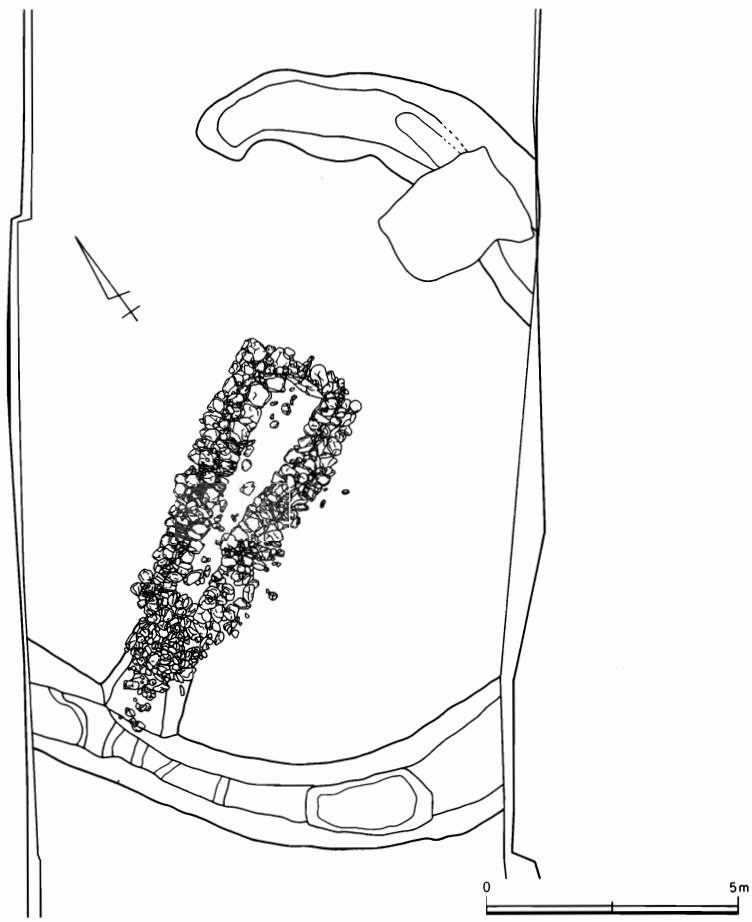
なお、この遺構数は平成7年6月末までのものである。

古墳群について

先に述べたように、これまでの調査によって7基の円墳と7基の小石室を発見しているが、今回は特に横穴式石室を持つ7号墳と小石室群



第2図　遺跡全体図

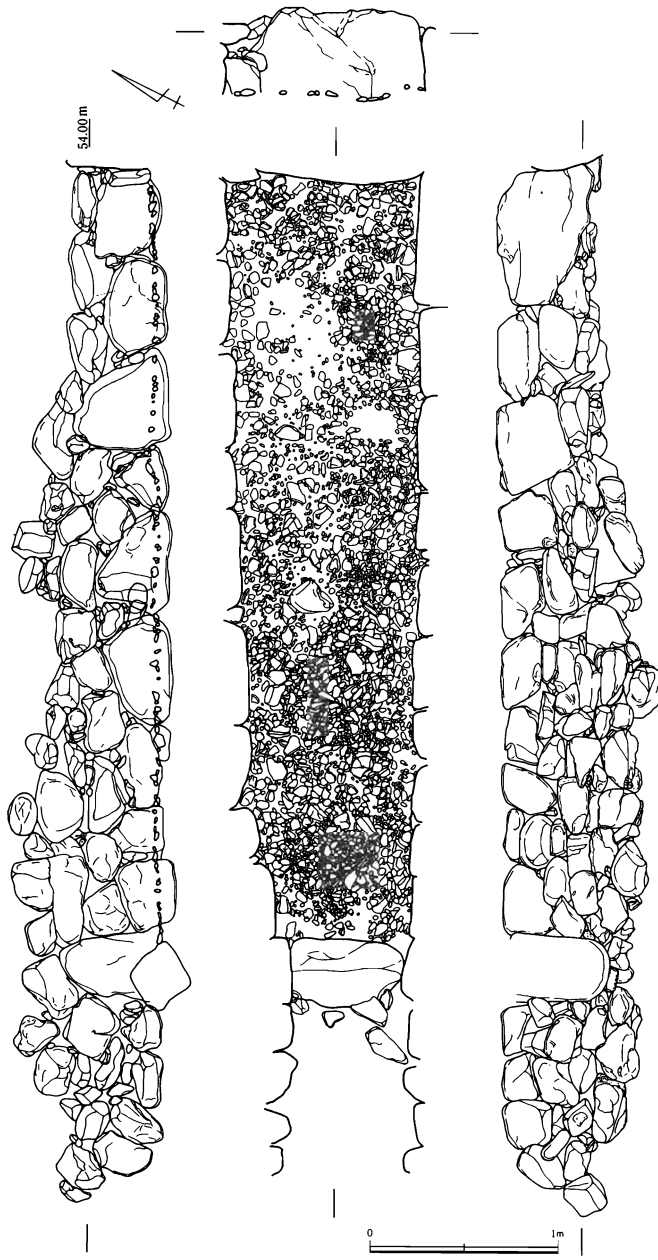


第3図　7号墳実測図

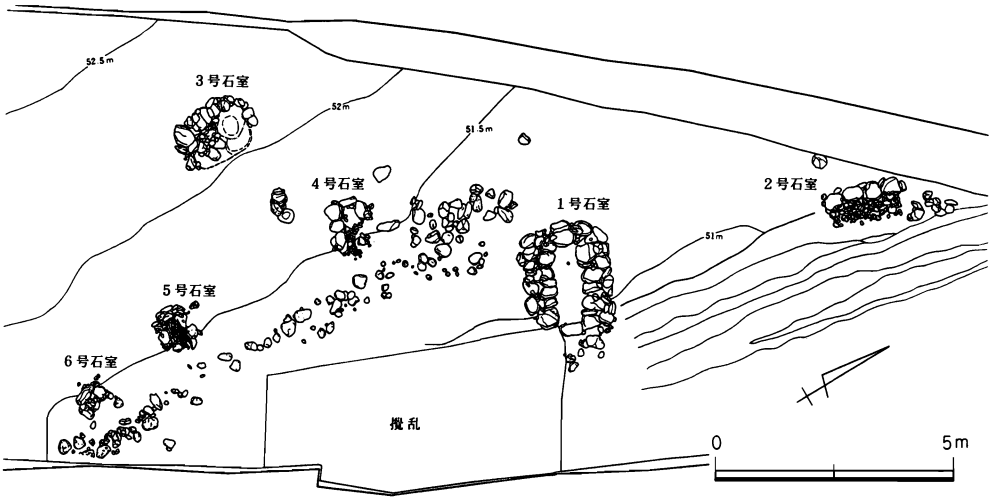
を中心に報告する。後述の( )内は調査時における遺構名である。

1・2・6号墳は上り線側中央附近から東側にかけて発見された。1号墳(1号周溝墓)は径約35m、2号墳(2号周溝墓)は径約18m、6号墳(18号周溝墓)は径約14m程を測る。下り線側では4・5号墳が発見され、4号墳(15号周溝墓)は径約20m、5号墳(18号周溝墓)は径約25m程を測る。これらはいずれも主体部が確認されなかったが、5世紀代を中心とするものと考えている。

7号墳(7号石室)は、上り線の1号墳の東側に隣接していて、東側の台地端より30〜40m程内側に位置する。標高は54.5mである。北側の



第4図　7号墳横穴式石室



第5図　小石室群全体図

一部では確認できなかったが、幅1.0～2.0m程の周溝を巡らした径15m程の円墳である。埋葬施設は横穴式石室で、掘り方内に河原石を積み上げて造られている。天井石は残されていなかったが、石室内部は良好な遺存状況であった。石室の平面形態は無袖形で、その規模は全長5.2m、奥壁幅1.0m、玄室長4.0m、側壁の高さ0.8m、羨道部幅0.6m、羨道部長1.4mを測る。石室の入口方向は西南西を示す。石室入り口から周溝にかけては、幅1.5mの墓道によってつながっていて、河原石を用いて閉塞されていた。石室内からは人骨の一部と多数の人歯を検出している。副葬品は、須恵器瑞1、土師器坏2、鹿角装刀子1、鉄鏃12、玉類（勾玉、管玉、丸玉、小玉）が出土している。南側の周溝底に掘り込まれた2.5×1.2m程の土坑内には、馬1体が埋葬されていた。覆土の堆積状況から初葬時に伴うものと考えられる。本古墳の時期は、出土した土器などから6世紀前半代に造営されたものと考えている。

8号墳（20号周溝墓）は、調査区域外に位置する石室の周溝と推定され、径30m程と考えられる。出土遺物は無いが、7世紀初頭前後と推定される。

小石室群は、上り線側の台地東側縁辺部に集中して発見され、標高では51～52mに位置する。1・4～6号石室は斜面に直交するように構築されているが、2・3号石室は斜面に平行に造られている。いずれも地山を掘り込んだ掘り方内に、河原石を積み上げて構築されている。その規模は最も大きい1号石室で長軸1.8m、短軸0.5mを測り、最も小さい8号石室は長軸0.4m、短軸0.15mを測る。出土遺物は1号石室から人歯が数点出土したのみである。またその時期は、周辺から出土した土師器坏から7世紀中葉以降に造営されたものと考えている。

9．ま　と　め

今回発見された7号墳は、石室内より出土した須恵器瑞がMT15窯式に並行する時期のものであり、その年代は6世紀初頭から前半にかけてとされている。古墳の規模が径15m程と小さく、無袖で狭長な横穴式石室であること、入り口方向が西に向くことなど古い段階の横穴式石室の特徴が認められる。副葬品も6世紀でも古い段階に見られる鉄鏃や細い管玉などが出土した。以上の様な、石室の特徴や遺物の様相から、6世紀の前半代に古墳が造られ、その後何回か追葬が行われたものと考えられる。

小石室群は、横穴式石室を小型化したような様相から言えば、近年各地で発見されている終末期的な古墳群と考えられ、8世紀代にまで降る可能性もある。

本遺跡は神奈川県下でも数少ない古墳群の調査であり、県下の古墳文化を考える上で注目される遺跡である。調査終了後の整理に向けてさらに慎重に検討していきたい。

《記　念　講　演》

神奈川県の「地震考古学」

神奈川県立旭高等学校教諭　　上本　進二

寒川（さんがわ）　旭（あきら）氏によって提唱された地震考古学は、①古文書に記録のない忘れられた地震を発掘し、②地下に眠る未知の活断層の存在を推定し、③地震の再来周期の推定に利用でき、④次に来る地震の被害予測に役立つ。さらに、⑤年代の判明した地震跡は考古学上の時代尺度となり、⑥環境変化や政変など歴史・考古学上の謎のいくつかを地震跡を用いて解明できる。

図１は、遺跡でみつかる様々な地震跡の模式図である。ａは逆断層で地震の痕跡と考えて良い。ｂ・ｃは正断層、ｄ・ｅは地割れであるが、これらは地震動で形成されることが多いものの、付近に崖や斜面があれば地すべりでもできる。正断層や地割れを地震跡と認定するには、周辺の地形や断層と地割れの密度・方向などを詳しく調べる必要がある。地震の発生年代は、地震跡のある遺構やこれを覆う地層に含まれる遺物と火山灰で推進できる。ｆ～ｉは様々な噴砂の砂脈で、ｎ～ｐは液状化した層内に残される流動跡。遺跡でこのうちのどれかが見つかったら地震の痕跡の可能性がある。

神奈川県内で地震の痕跡が集中する地域は、厚木―秦野間一帯と厚木―鎌倉を結ぶ線上である。これらの地域には、地下に埋もれた活断層や地震道がある可能性が出てきた。

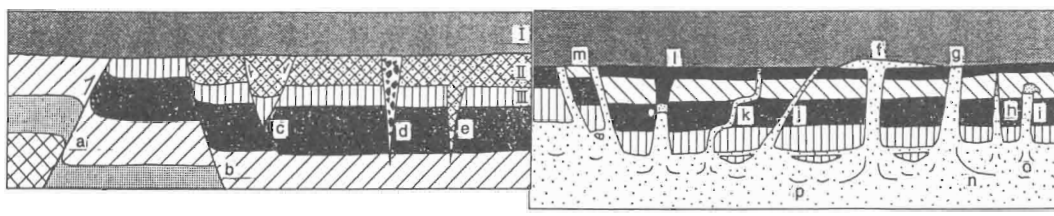


図１　地震跡の模式図　寒川（1992）『地震考古学』より抜粋

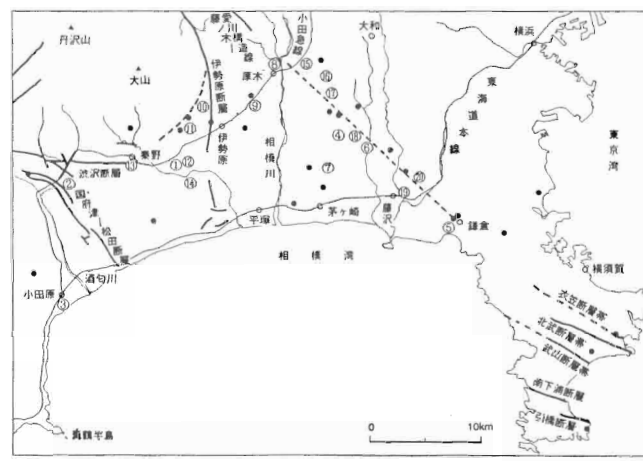


図２　神奈川県内の活断層と地震遺跡　上本（1995）「地震考古学（『最新地震論』所収）」より抜粋

〈MEMO〉

7. 川崎市久本横穴墓群

後藤　喜八郎

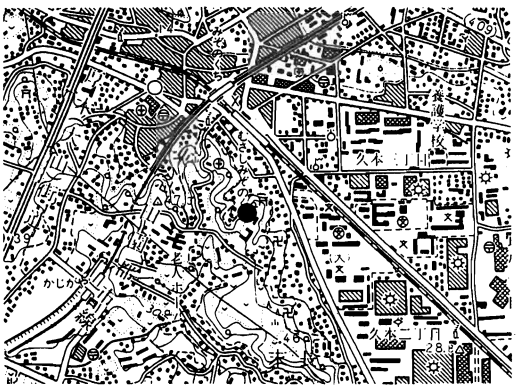
1．所　在　地　川崎市高津区久本１丁目464、465、471-1番地
2．調査主体　久本横穴墓群発掘調査団
3．調査担当者　後藤喜八郎
4．調査目的　急傾斜地崩壊対策事業に伴う事前調査
5．調査期間　平成６年７月27日～平成６年９月30日
6．調査面積　400㎡
7．遺跡の立地　（第１図）

本遺跡は、南武線溝の口駅の南側約300ｍに位置しており、北東に延びる丘陵の標高20ｍ前後の西側急傾斜面に存在している。

遺跡の現状は、横穴墓のある丘陵の西側を崖線に沿って公道が走っており、防空壕と確認された３基と横穴墓１基には粗大ゴミが廃棄されていた。本遺跡の丘陵の北側先端部には久本神社が鎮座しており、同丘陵の反対側の急傾斜地には同じく他の横穴墓が確認されている。さらに、対面する丘陵の急傾斜地には久本桃之園横穴墓（１基が発掘調査されている）をはじめとする複数の開口した横穴墓が存在している。遺跡の周辺は、丘陵の谷頭と頂上部はマンションの造成によって開発をうけている。調査地域は唯一開発されずに残った部分であり、遺跡の存在する丘陵部は全面に雑木が生い茂り、新たに検出した横穴墓は良好な保存状態であった。

8．調査の概要

本遺跡は、遺跡地図『川崎の遺跡』（末長-4）では10基の横穴墓墳が確認されていた。当該地の急傾斜地崩壊対策事業による開発計画が神奈川県川崎治水事務所によって示されたため、県・市教育委員会によって調整・検討された結果、記録保存を目的とした事前発掘調査が実施されることとなった。なお、発掘調査は本横穴墓群の中の４基を対象としたものであったが、調査の結果このうち３基は防空壕と判明した。しかし、未確認の調査対象地域の表土掘削後に新たに６基が確認されたため、調査期間を１カ月延長して合計７基の横穴墓の発掘調査を実施した。



第１図　遺跡の位置図

７基の横穴墓は、南北二箇所の支群に離れて北側３基（Ａ支群とする）と南側４基（Ｂ支群とする）が検出された。

Ａ支群は１～３号横穴墓によって形成されており、標高17～20ｍの位置に構築されていた。このうち１・２号横穴墓は既に開口していたが、３号横穴墓は未開口の良好な保存の状態で検出された。

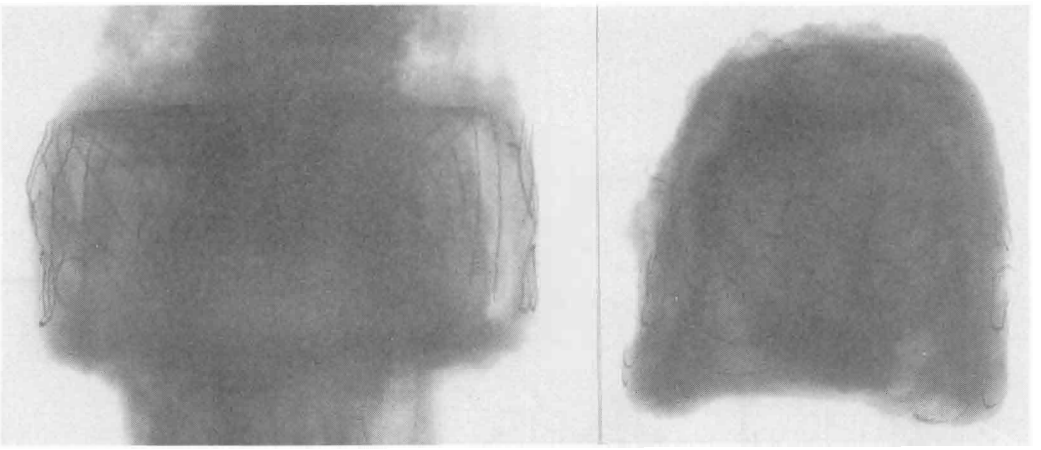
Ｂ支群は５～８号（４号は欠番）横穴墓によって形成されており、標高19～21ｍの位置に構築されていた。これらの横穴墓は表土掘削後に新たに検出されたものであり、このうち５・７号横穴墓は未開口であった。

Ａ・Ｂ支群の横穴墓は、泥岩と砂層からなる高津互層を穿って構築しており、砂層部が横穴墓の床になるよう排水効果を上げる工夫が見られた。今回は、３・６・７号横穴墓を中心に発表するものである（第２図）。

（３号横穴墓）

表土の掘削後に検出されたものであり、墓道及び羨道・玄室はほぼ完全な保存状態の未開口の横穴墓である。閉塞は、長径20㎝の河原石の礫を多数積み上げて形成されており、前面の墓道も覆土の状況から版築状に埋め戻してあることが判明した。平面形は、玄室が左右（以後、左右表示は玄室から羨道部をみた側を言うもの

第2図　3、6、7号横穴墓全測・出土遺物図



第3図　3号横穴墓・象嵌X線図

とする）に袖をもつ逆台形を呈していた。玄室の天井は、奥壁中央部に最高点をもつアーチ形を呈していた。敷石は、羨道の排水溝と玄室に検出された。排水溝は、敷石の礫の下より玄室の壁際と奥壁から羨道部の中央に延びる状態で検出された。

「出土遺物」（第3図）

ガラス小玉・丸玉、切子玉、管玉等の多量の玉類が出土した。また玄室の敷石上には鉄刀が奥壁に沿って一振り出土し、それを初めとして羨道方向に等間隔に合計四振りが検出された。四振りの鉄刀は、柄頭が奥壁より左側、次が右側、左側、右側とそれぞれ互い違いの方向に見いだされることから被葬者の埋葬頭位を知る重要な手掛かりとなる。また、奥から2番目の鉄刀には縁金具に象嵌がX線写真によって確認され、近接した地点からも同じく象嵌をもつ柄頭が検出された。いずれも蕨手状の唐草文系の銀象嵌であることから同一固体のものと思われる。他の副葬品は一連に復元できる首飾りや耳環の他、玄室の右側壁付近に須恵器の坏と短頸壺が並んで出土している。また、羨道部排水溝上からは須恵器の無蓋高杯が確認できた。

（6号横穴墓）

3・5号横穴墓と同様に表土の掘削後に検出されたものである。墓道は削平されており、羨道と玄室の一部には天井部の落盤が認められた。この落盤によって玄室部は床から40～80㎝埋没していた。本横穴墓群中、2番目に小さな規模のものである。

平面形は、玄室が左右に緩い袖をもつ逆台形を呈していた。玄室の天井は、奥壁中央部に最高点をもつアーチ形を呈していた。

敷石は、羨道と玄室に検出された。敷石の状態は、羨道部では大きな河原石を敷きつめているが、玄室は5号横穴墓と同様に大きい河原石を敷きつめた後に、さらに細かい礫で覆うように構築されている。しかし、5号横穴墓のものとは異なり敷石の仕上がりは良好ではなく、玄門部の左側付近と右側奥壁隅には敷石がみられないことから後世（追葬時も含む）に一部攪乱がなされた可能性がもたれる。また、玄室の床面の礫間には炭状のものが5㎝の厚さで敷きつめられていた。

玄門部は、地山を「框石」状に削り出してその境としていることが判明した。この「框石」状に削り出した地山には、中央部に玄室から羨道に向かって排水孔が穿たれている。排水溝は、敷石の礫を除去した後に玄室の側・奥壁を一周する状態で検出されている。玄門に溜まった水は、玄門部の排水穴を通して羨道部に導かれている。羨道部には排水溝の検出は認められないが、かわりに羨道部の床全体の掘り方が一段低くなっており、羨道部の床全体が排水溝の役割をする工夫がなされていた。

「出土遺物」（第4図）

ガラス玉、耳環が出土したが、土器等は認められなかった。

第4図　6号横穴墓・奥壁線刻画図

「奥壁線刻画」

線刻画は、奥壁上部の横1.5m、縦0.7mの範囲内に2種類の鋭利な物で描かれており、良好な状態で保存されていた。線刻画に描かれたものは、画面左側には怖い形相の「コケシ型人物像」が一人とその左には「垂下する放射状の不明線刻画」が二箇所に認められる。また、中央部には「口を一文字に結んだ悲しい表情の「コケシ型人物像」の頭部が見える。画面右側には三角形の描写から切妻屋根をもつ建物が描かれている。建物の描写からみて高床式の大型建物と思われる。また、棟右側端には三角形状の線刻の描写が見られることから建物の千木・鰹木等の構造物なのか、或いは旗等を描いた物なのか大いに注目される。さらに、棟左側端からほぼ水平に画面左側の不明線刻画まで延びる一条の線刻画が何を意味するものなのか、今後は一連の叙事的線刻画としての解明が必要となろう。

（7号横穴墓・第5図）

未開口の横穴墓である。墓道は完全に削平されており、羨道と玄室はほぼ完全な保存状態である。閉塞は、長径25cmの河原石の礫を多数積み上げて形成されている。奥壁部には、刳り貫きの造付石棺が検出された。規模は、棺の内法で幅0.4m・長さ1.7m・深さ0.5mを測り、棺床には小礫が敷きつめられていた。閉塞されていたにもかかわらず、石棺の蓋はかけられていなかった。このことは、蓋の一部が玄室中央右側壁際と石棺左側の側壁に接する様に散乱していたことから、追葬時に攪乱されたことが推測できる。平面形は、玄室が左右に袖をもつ不整隅丸方形を呈していた。玄室の天井は、玄室中央部に最高点をもつドーム形を呈していた。敷石は、羨道と玄室の一部に検出された。羨道の閉塞は、完全な状態であることや不自然な敷石の検出状況からみて追葬時に玄室の敷石を閉塞石に転用した可能性がある。排水溝は、敷石の礫を除去した後に羨道部と玄室の壁際と奥壁から羨道部の中央に延びる状態で検出された。また、石棺の床中央部には玄室の排水溝に繋がる穴が

第5図　7号横穴墓・石棺全景図

穿たれていた。さらに、羨道部の排水溝には敷石が天井石となることにより効果的な排水機能をもつ工夫がなされていた。

「出土遺物」

ガラス玉、土製丸玉、耳環が石棺内の床の礫間から出土した。以上の副葬品が棺の右側（東側）から集中的に出土する状況は、被葬者の埋葬頭位を知る重要な資料となる。

他の副葬品は、羨道部の右側壁付近に須恵器の「甕」と右側玄室より鉄刀が出土した。

9. ま と め

今回の調査は、当初既に開口していた横穴墓を対象にしたものであった。これら4基は1基が横穴墓、残り3基が防空壕と確認されるに至ったが、新たに6基の横穴墓と4基の防空壕が発見された。また、A支群では2号横穴墓より高い位置に他の横穴墓が存在すること、埴輪片等の検出ができたこと、B支群では8号横穴墓の上部に開口した横穴墓（現在は貯蔵穴として使用）が確認できたことなどは、傾斜地の更に高い位置には本横穴墓群に包括される他の横穴墓や埴輪をもつ古墳が存在することが考えられ、本横穴墓群の広がりや性格を見る上に於いても重要な成果となった。

今後の課題は、未開口の横穴墓の出土遺物の分析と閉塞の状況をはじめとする個々の横穴墓の特徴等の考察がある。A・Bの二支群をもつ本横穴墓群の在り方や先後関係、出土遺物からみる年代、遺構と構築の特徴、未開口にもかかわらず追葬時としか考えられない玄室の攪乱等と様々な問題が残っている。また、今回の資料の中で最も重要で困難な「線刻画」の解明は、本遺跡の性格だけでなく当時の横穴墓の葬制や被葬者の古代社会における地位や取り巻かれた社会環境を見る上においても大変貴重なものとなろう。

8.　平塚市構之内（かまえのうち）遺跡

日野一郎・上原正人

1．所　在　地　平塚市中原上宿字構之内181番地の1

2．調査主体　平塚市遺跡調査会（会長　日野一郎）

3．調査担当者　上原正人

4．調査目的　工場建設に伴う事前調査

5．調査期間　平成6年5月16日～10月31日

6．調査面積　1827㎡

7．遺跡の立地

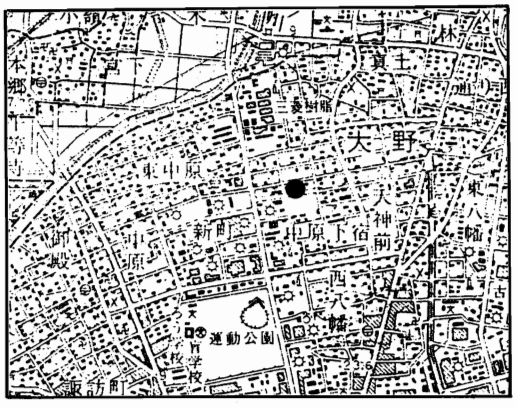
調査地は相模川下流右岸の砂州・砂丘地帯、ＪＲ平塚駅から北へ約2.5kmの所に位置する。

周辺の発掘調査から、砂州・砂丘列上は古代の居住地としての利用がおおく、各列の間の凹地からは主として溝状遺構や井戸址などが検出され、水利空間として利用される傾向がみられる。本遺跡も砂州・砂丘上の第1地点Ａ地区と本第3地点では、掘立柱建物址や竪穴住居址が主体となり、凹地にかかる第1地点Ｂ地区や第2地点は水利を利用した生産址と位置付けられる。各地点の出土遺物は第1地点Ａ地区で多量の施釉陶器や掘立柱建物址の埋納鏡、第2地点では人面墨書土器など一般的な集落とは異なる様相を呈している。

周辺の遺跡には1km西に「曹司」墨書土器を出土した中原上宿遺跡群、東の四之宮・真土には六ノ域遺跡や高林寺遺跡、稲荷前Ａ遺跡を中心に、鍛冶工房址と推定される山王Ｂ遺跡・天神前遺跡、瓦塔を出土した神明久保遺跡などの官衙に関わる遺跡群が広がり、9世紀以降相模国府の有力な推定地と考えられてきた。最近、稲荷前Ａ遺跡から出土した8世紀中葉の「国厨」墨書土器は四之宮に国府が存在したことを裏付ける有力な資料となり、土器年代から奈良時代中期以前の初期国府所在地を平塚に求める研究も発表されている。

8．調査の概要

調査地は工場敷地内であり、部分的に鉄筋基礎による撹乱がみられたが、保存状態は比較的良好であった。遺構は表土から約1.0～1.4m下に存在する。当時の地形を復元すると調査区中央から南側が凹地にかかり、緩やかな傾斜をもって下っている。遺構の密集度も道路状遺構を境にして調査区北側と南側では差がみられた。以下に近世以降を除く遺構・遺物の一覧を示した。



第1図　遺跡位置図（縮尺：1／50,000）

〈遺構〉

竪穴住居址68軒、掘立柱建物址4棟、井戸址4基、土壙154 基、溝状遺構42条、道路状遺構2条、土壙墓・配石墓各1基、ピット382本、不明竪穴状遺構7基、

〈遺物〉

土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、円面硯、銙帯、石帯、皇朝十二銭（隆平永寶・神功開寶）、宋銭、銅印「平」、焼印「王」、銅・鉄製品、縄文土器（中・後期）　コンテナ63箱

以上の遺構で土壙としたものの大半はいわゆる円形土壙と呼ばれるものである。この他に2本の道路状遺構、銅印を出土した竪穴住居址、掘り方から焼印の出土した井戸址が注目される。次にこれらの遺構を簡単に述べる。

道路状遺構　調査区を東西に横断し途中北へ分岐する。東西にのびるものを1号とし、分岐するものを2号とする。1号は遺存状態が悪く重複するほとんどの土壙やピットに壊されている。硬化面の最大幅は6.2mを測り、その表面は轍状に凹んだ部分がみられるほかは平坦であ

写真１　調査区全景

第２図　銅印印影図
（縮尺２／３）

写真２　銅印出土状況

る。南に平行して、少なくとも３度掘り替えられた溝が伴う。北側の溝の覆土上には硬化面が重複していることから、ある時期以降北側には溝を持たなかったと考えられる。２号は幅1.6ｍで、１号から84°の角度をもって分岐する。１・２号とも硬化面が途切れなく繋がる事から同時期に機能していたと考え、８世紀以降溝の掘返しが行なわれながら少なくとも10世紀迄道路として機能していたと考える。

竪穴住居址・掘立柱建物址　８世紀前半から居住が開始され、９世紀中葉～10世紀中葉に最盛期を向かえた。特に道路状遺構の南側は10世紀に属するものがほとんどである。また、竪穴住居址の軸方向の傾きから道路状遺構を意識し構築されていると考えられる。銅印を出土した竪穴住居址は他遺構との重複関係から10世紀前半に廃棄されたものである。2.41×2.38ｍ、深さ33㎝規模を持ち、南東隅に竈を施設する。

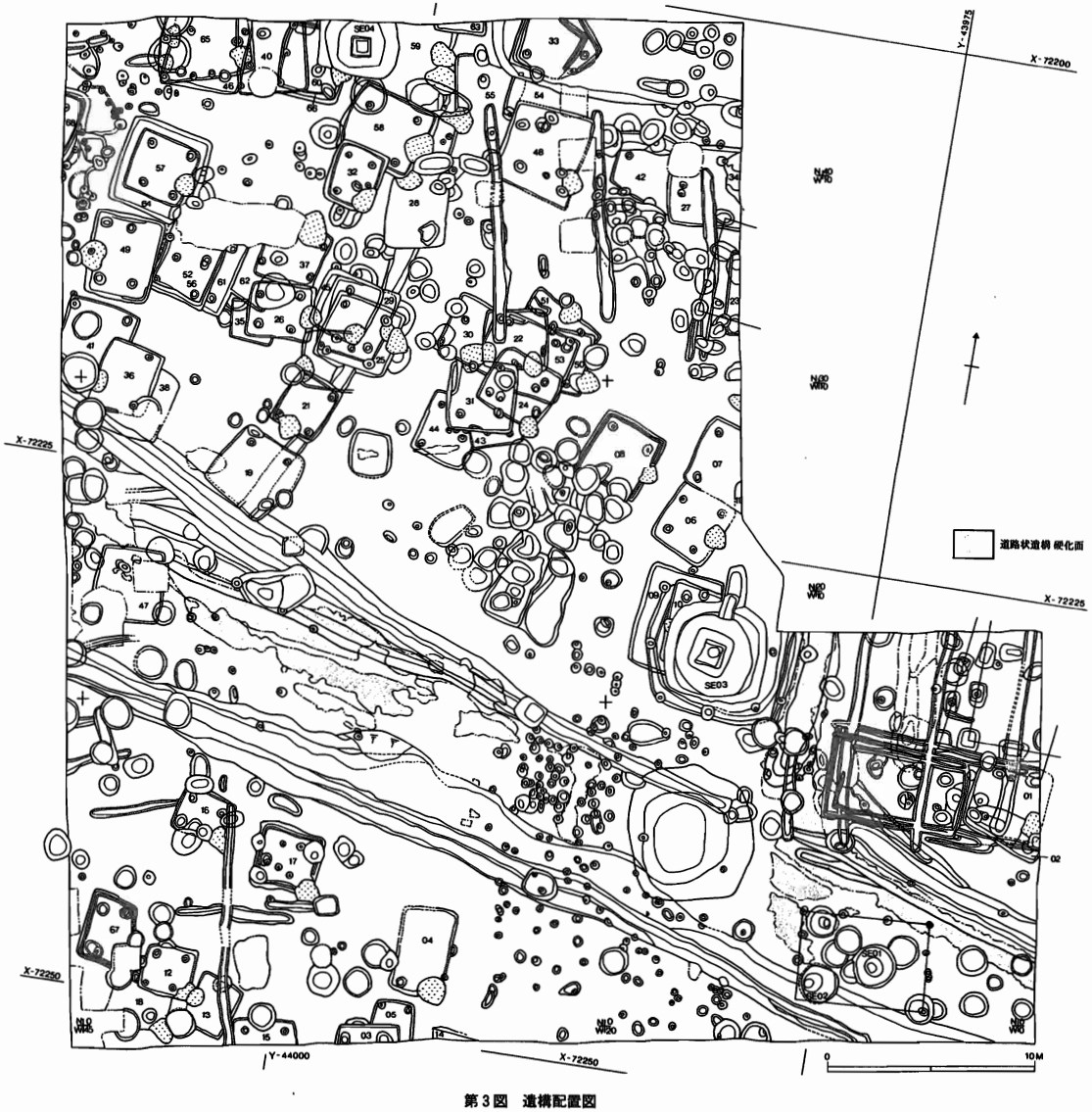
銅印は住居址の東壁際下層から出土し、印面は2.8㎝四方、高さ3.2㎝、重さ31.8グラムで、「平」の印文を持つ。大きさや形態から私印である。表面の観察から使用した痕跡は少なく残存状態は良好である。

掘立柱建物址の内１棟は遺構の重複関係から中世の所産と考えられる。残りの３棟は９世紀に属し柱穴は方形の掘り方をもつ。完掘したものはないが、２間×３間の配列が想定される。

井戸址　検出した４基の内、井戸枠を伴うものは２基（ＳＥ０３・０４）であり、規模からともに飲料用と考える。ＳＥ０３は掘り方の規模4.84×4.72ｍ、井戸枠は1.10×1.05ｍ、確認面からの深さ3.12ｍを測る。また井戸の三方を囲む溝状遺構が付属する。この溝状遺構がどのような機能をもっていたかは不明だが、北側で途切れることから流水ではなく柵状の囲いの可能性があり、その場合北に入口を想定できる。出土遺物から10世紀後半には破棄されたと考える。掘り方覆土から「王」の焼印を出土している。長さ17㎝を測る。市内では２例目で、中原上宿Ⅲ区で「井」を出土している。

９．ま　と　め

本遺跡は六ノ域遺跡や高林寺遺跡など四之宮周辺の官衙関連遺跡とは異なり、曹司と推定できる掘立柱建物址群こそなかったものの、銅印を出土したことから、これを所有できる地位にある人物の居住地として捉えられる。現状では官衙内集落の一つと位置付けている。また、道路状遺構はその規模や直線的な特徴から官道の可能性が高い。市内で幅６ｍを越える道路状遺構の検出は初めてであり、本遺跡の成果だけでこの遺構の性格を断定することはできないが、官道＝東海道とすれば古代の交通史を知る上で大きな手がかりとなり得る遺構である。さらに国府所在地と推定される四之宮周辺遺跡群とこの道路との関わりも、今後の延長線上の発掘調査において重要な課題となろう。


X-72200
Y-43975
X-72225
X-72250
Y-44000
道路状遺構 硬化面
SE01
SE02
SE03
SE04
0
10M

第3図　遺構配置図

9．　国指定史跡永福寺跡

福田　　誠

1．所　在　地　鎌倉市二階堂216－1外他
2．調 査 主 体　鎌倉市教育委員会
3．調査担当者　福田　誠
4．調 査 目 的　国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る、平成6年度発掘調査（「苑池の調査」「遣水の調査」「堂舎背後の調査」）
5．調 査 期 間　平成6年8月1日～平成7年2月6日
6．調 査 面 積　1040.8㎡

7．遺跡の立地

永福寺跡は、鎌倉市二階堂字三堂他に所在し、南側を除き、北、東、西の三方を山で囲まれている。当地は、滑川の支流の一つ、二階堂川が開いた開析谷で、二つの谷（西ヶ谷、杉ヶ谷）の合流点がその中心で、現在東西約100ｍ、南北約200ｍ以上の平坦地が広がっている。この平坦地と三方の山、谷間を含めた地域がかつての寺域と考えられ、この内約86,000㎡が史跡に指定されている。

永福寺は、源頼朝が鎌倉に建立した三大寺院（鶴岡八幡宮・勝長寿院・永福寺）の一つで、文治5年7月（1189）に行った奥州合戦時に、平泉の地で見聞した、中尊寺、毛越寺、無量光院等の精舎を模し、奥州合戦で死んだ義経、泰衡を始め多くの将兵の鎮魂のために建立したと『吾妻鏡』に記述されている。建久3年（1192）に二階堂が、同5年(1194)には薬師堂の開堂供養が行われている事から、この頃主要な伽藍が完成したと推察される。

8．調査の経緯

史跡整備のため、昭和56年度から毎年計画的に発掘調査が行われ、平成6年度の調査は、整備委員会の指導助言に基づき、「苑池の調査」「遣水の調査」「堂舎背後の調査」を主な目的に、調査地点を設定した。

9．調査の概要

第1調査区

昭和62・63年度に調査を行った、薬師堂から延びる北翼廊の北側に設定した。63年度に確認した遣水の流路が予想される地点である。

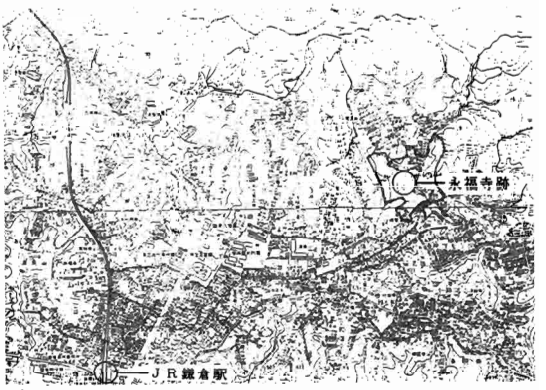


図1　永福寺位置図

第2調査区

昭和59・60年度に調査した、南複廊、阿弥陀堂、南翼廊の西側に設定した調査区である。伽藍背後を流れる溝、道路、目隠し塀等が予想される地点である。

第3調査区

平成5年度の調査区の北側に設定した。昨年度調査を行った苑池の東側の汀線が引き続き検出されるものと予想される地点である。

10．調査の成果

第1調査区

堂背後を、北から南の向かって流れる排水溝（2溝・3溝）を検出した。昭和62年度・平成元年度・平成4年度に確認した溝である。

北側の山裾に沿って西ヶ谷から流れ出る遣水の流路を確認した。遣水は浅く掘られており、周囲に砂利等は認められなかった。流路中程に松の根株が検出され、S字状に曲がりくねっている。また西ヶ谷の出口部分で、遣水と排水溝（2溝・3溝）に分流していることが確認された。

第2調査区

第1調査区で検出した、堂背後を北から南に向かって流れる排水溝（2溝・3溝）を検出した。従来の調査と今年度の調査で、堂背後にかかる排水溝をすべて調査したことになる。

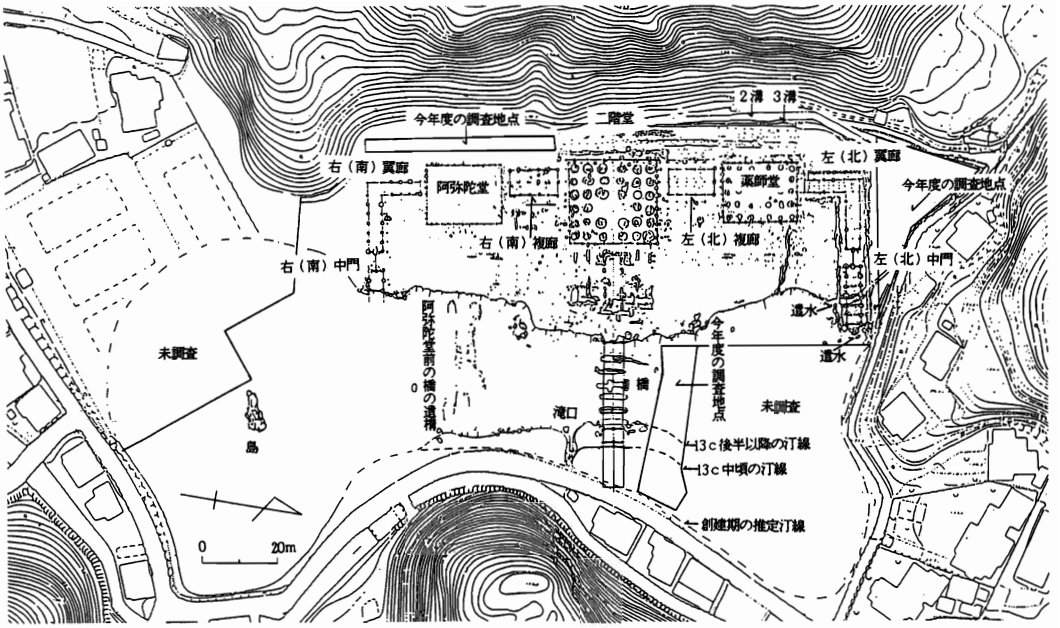


図2　永福寺の伽藍配置と周辺の地形

この他に堂舎に平行する、平成元年度の調査でも検出している目隠し塀の柱穴列（約2m間隔）と排水溝と目隠し塀の間で砂利敷きの道路（幅約4m）を検出した。

第3調査区

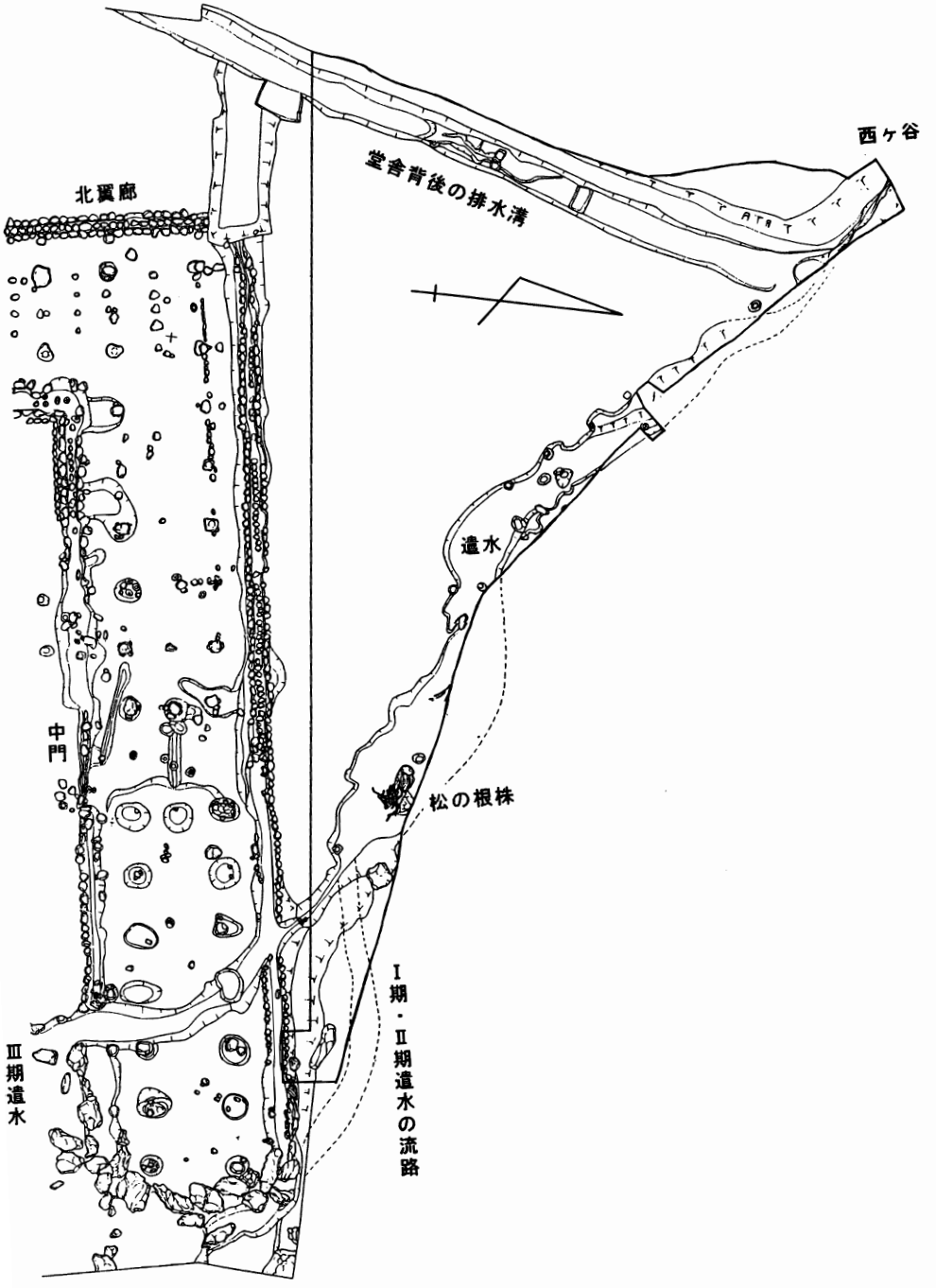
平成5年度に検出した橋遺構の北側に延びる、苑池東側汀線を検出した。Ⅰ期の汀線は従来の調査で確認されているように、今年度の調査でも現市道際に沿っていることが確認された。またこれまでの調査から、Ⅱ期・Ⅲ期に大規模な汀線の改修が行われ、徐々に苑池の範囲が狭められていることが今年度も確認された。またこの改修で広がった東側の陸地部分で、鎌倉石切石を据えた溝と敷き石列が検出された。二階堂を対岸に望む、建物の基礎部分と推定することもできる。

10. 出土した遺物

今年度の調査で出土した遺物の大半は、堂舎背後の排水溝の覆土、池の堆積土中からのもので、Ⅰ期からⅢ期に渡って使用された鐙瓦・宇瓦・鬼瓦・女瓦・男瓦である。その出土状況から遺構との関連や年代等を知り得る資料はなかった。第1調査区ではⅠ期の小型の巴文鐙瓦の出土が目立つ。第3調査区からは、堂内具として使われた蓮の蕾等が出土している。

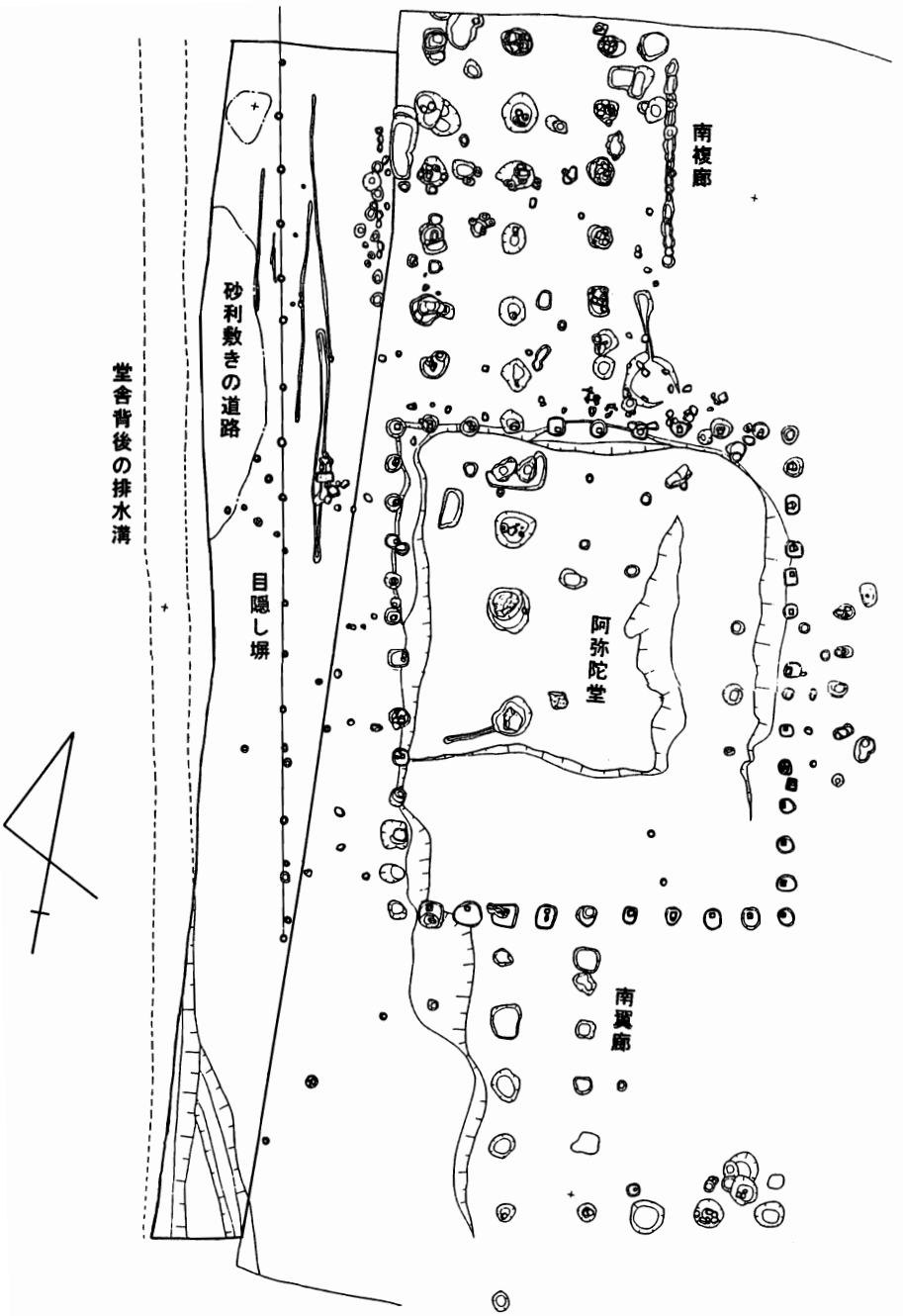
11. まとめ

平成6年度の調査は整備委員会の指導助言に基づき、「遺水の調査」昭和63年度調査時に確認した遺水の流路。「堂舎背後の調査」南複廊、阿弥陀堂背後の確認。「苑池の調査」昨年度検出した汀線の続き等の確認を主眼に置いて実施した。第1調査区では、Ⅰ期遺水が平泉毛越寺の遺水のように、廊の外側から池に流れ込み、Ⅲ期遺水が曲がりくねった流路の途中に松や景石を配し、100／3 勾配で造られていることが確認されたことは「作庭記」の内容と対比する上で興味深いことである。水源である西ヶ谷の水を遺水と排水溝に分け、池に流れ込む遺水の水量を調節していたと考えられる。第2調査区でもこの排水溝が確認され、昭和61年・62年・平成元年・平成4年とあわせ、堂舎背後部の排水溝を全て調査したことになる。ただし未調査の南翼廊より南は苑池の排水とかかわってくるものと推測される。また中心伽藍内を通らずに奥にある僧坊へ行くことが出来る道路と目隠し塀が確認されたことになる。第3調査区では鎌倉石の溝と敷き石が注目される。創建当初にはなかった建物が、検出されたことは、宇治平等院の小御所にあたる御拝所や舞台等の施設があったとを窺わせるものである。



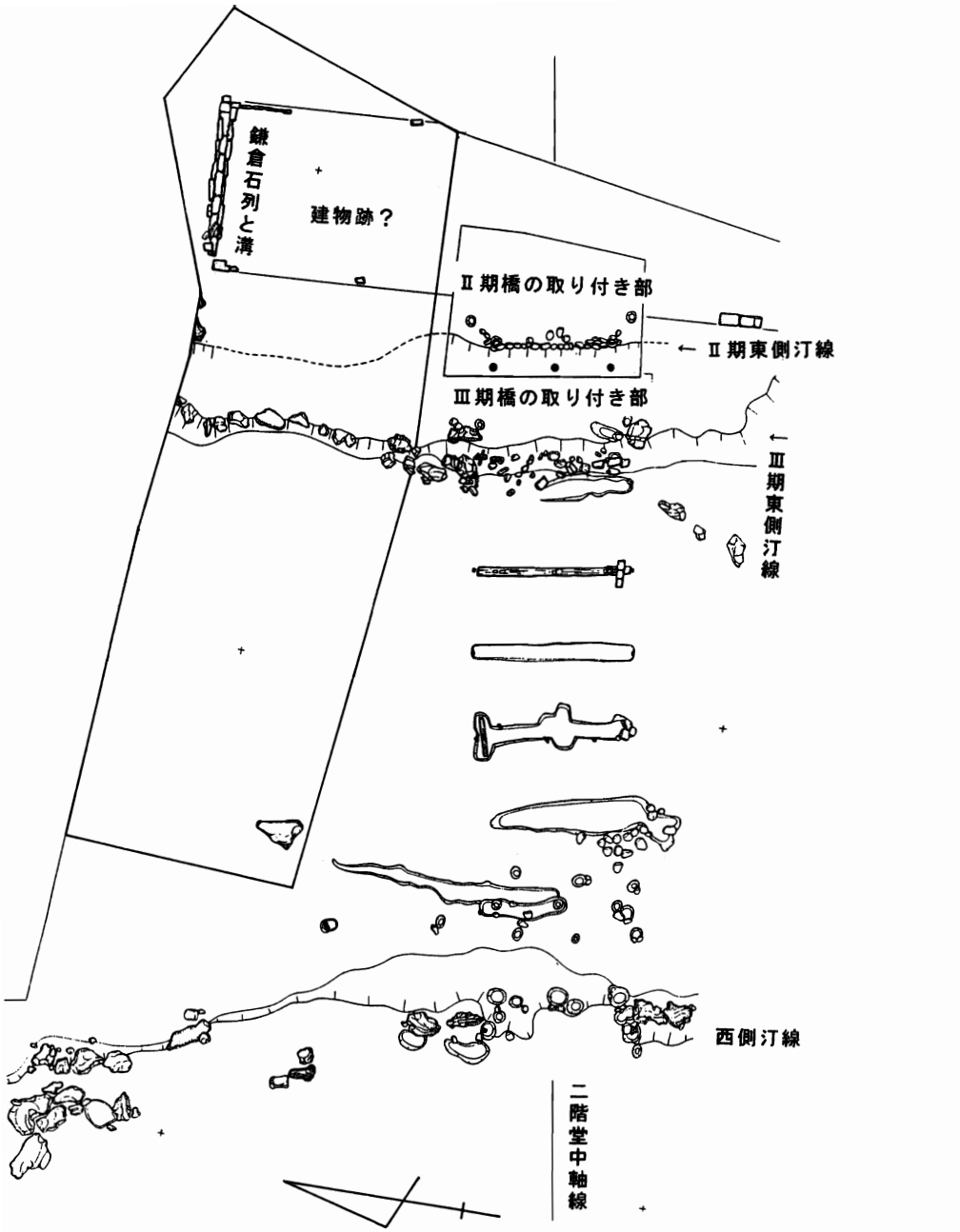
S=1/300

図3　平成6年度・第1調査区



S=1/300

図4　平成6年度・第2調査区



S=1/300

図5　平成6年度・第3調査区

第１調査区
Ⅲ期遺水の流路
　流路の中程に松の根株が見える。

第２調査区
砂利敷きの道路と目隠し塀
　岩盤面上に貝砂を敷きその上に
　砂利を敷き詰めている。

第３調査区
Ⅲ期東側汀線
　汀には景石を並べ、岸辺は土丹で固めている。

10. 山北町河村城関連遺跡

安藤　文一

1．所　在　地　足柄上郡山北町岸字土佐屋敷2352番地外

2．調査主体　山北町河村城関連遺跡調査会（会長・石田公夫）、河村城関連遺跡発掘調査団（団長・石丸　熙）

3．調査担当者　安藤文一

4．調査目的　「山北町総合計画」等に伴う河村城関連遺跡範囲確認調査

5．調査期間　平成4年度調査　平成4年6月20日～平成4年11月19日
平成5年度調査　平成5年10月7日～平成5年12月18日
平成6年度調査　平成6年11月2日～平成6年12月20日

6．調査面積　約1200㎡

7．遺跡の立地

河村城跡は、酒匂川左岸の標高約225m、酒匂川河川敷との比高差約130mを測る丘陵上に築かれた山城である。本城跡の立地する丘陵は東方へ浅間山から丸山へと連なるが、西から南側を酒匂川が蛇行し、北側には皆瀬川が流れてそれぞれ深い谷を開いて自然の外堀としたまさに要害とされる場所に立地している。しかし、現地形は江戸時代の宝永山噴火による火山灰を含んだ氾濫に対処するため、堀割によって皆瀬川の流路が変えられているものである。

周辺には戦国時代を中心に数多くの城砦が構築されている。箱根山系には足柄峠から伸びる尾根筋に足柄城、阿弥陀尾砦、浜居場城が、丹沢山系では湯ノ沢城、中川城、大仏城山、鐘ケ塚砦、新城、松田城等であり、いずれも甲斐・武田氏、駿河・今川氏等に備えたものが多い。

8．調査の経緯

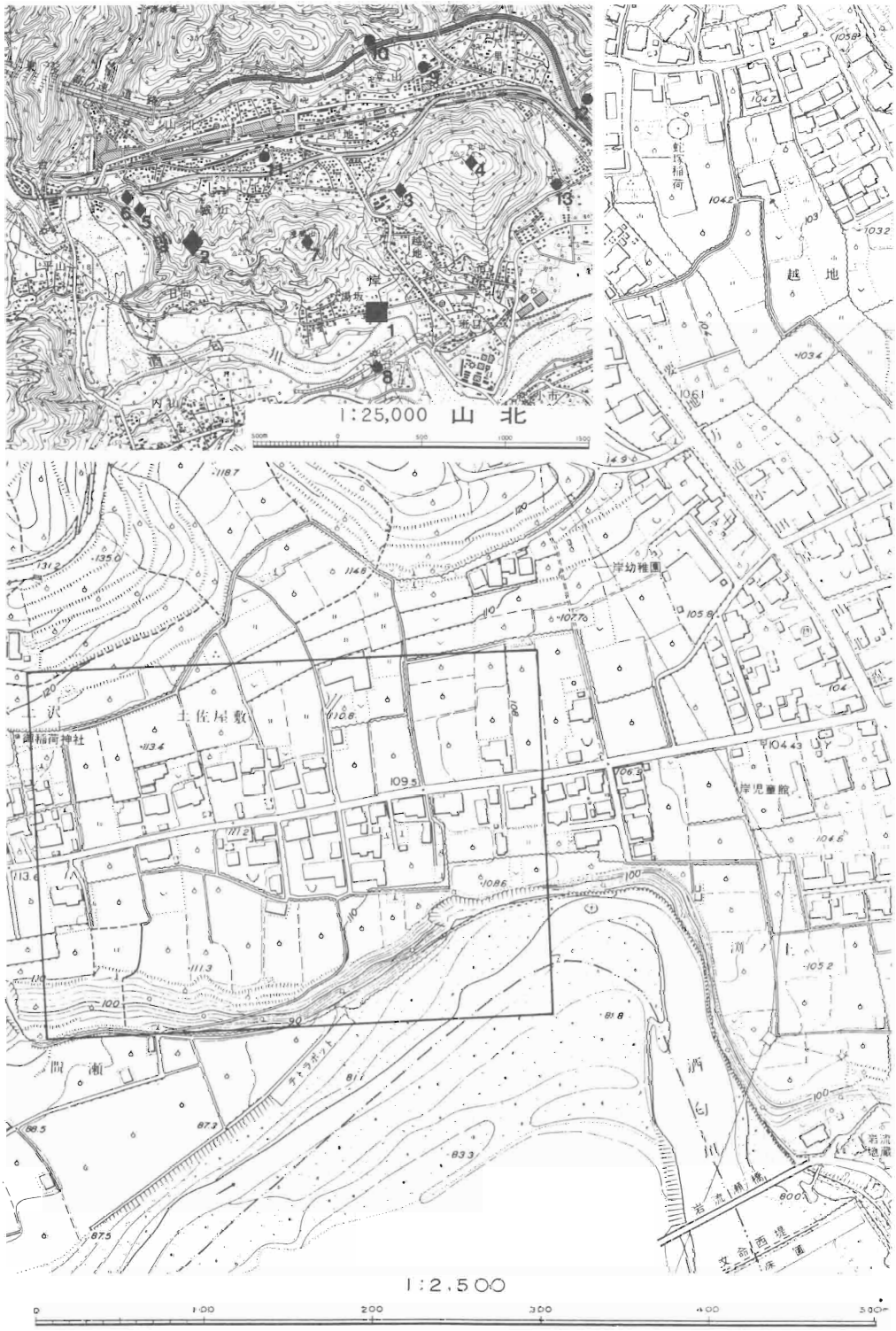
河村城跡については、今後の開発計画に相俟った遺跡保護の重要性を認識された山北町では県文化財保護課との協議を続けたなかで、国・県補助対象事業としてその範囲確認調査を実施することとした。その第1回目は、平成元年から平成3年度にわたる継続事業として河村城跡本体に関する測量・発掘・伝承・文献調査等を実施し、それらの成果をまとめたものとして既に河村城跡―河村城跡遺跡詳細分布調査報告書―（山北町河村城遺跡調査会・山北町教育委員会、1992）が発刊されている。なお、この間に山北町では「ふるさと創生事業」として河村城跡の一部公園化を図ることとなり、これに伴って平成4年1月には本城郭・小郭・茶臼郭に及ぶ発掘調査を行って畝堀等を確認し、現在は整備も一応完了して平成6年5月21日には、「河村城址歴史公園」として町民を中心とした憩いの広場となっている。

第2回目の調査は、三井造船株式会社による丸山開発に絡み根小屋・付随施設等を対象とした遺跡範囲確認調査を実施することになったもので、当初平成4年から同6年にわたる調査を行う予定であったが、平成5年度の発掘調査によって豪族居館址と思われる遺構が検出されたため、その性格をより明確にすべく調査を1年追加し、平成7年度に調査報告書を刊行して全事業を終了する予定である。

9．調査の概要

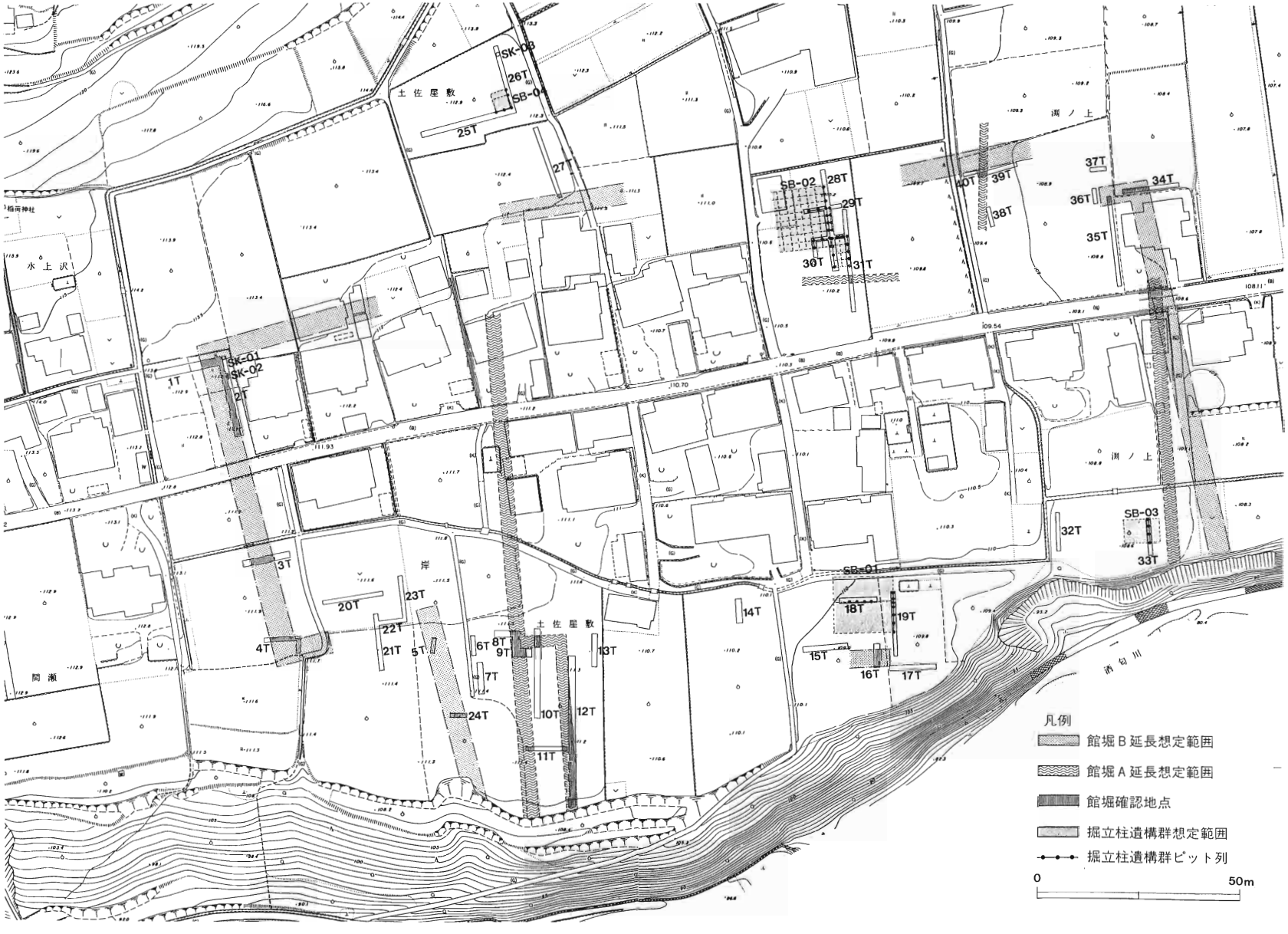
平成4年度では、地形的に河村城跡（第1図－2）の付随施設等の存在が予測された河村小学校裏（第1図－3）、丸山山頂（第1図－4）、大久保平周辺（第1図－5・6）において発掘調査を実施したものの、いずれの地点においても江戸時代中期以降の天地返し遺構群を確認しただけで、中世期の遺構・遺物は何ら検出できなかった。この天地返し遺構とは宝永4年（1707）の富士山噴火による火山灰を天地返しして田畑に復旧した名残りであり、当時の農民の辛苦が偲ばれる。

平成5・6年度では河村土佐屋敷や秀清屋敷の伝承が残る酒匂川左岸の河岸段丘面（第1図－1）を調査したわけであるが、この段丘面は標高約110mで北西から南東へ緩やかな傾斜をなしている。段丘崖は河川敷との比高差約30mを



第1図　遺跡の位置と第2図範囲（下図枠線）

（1 今回調査地点　2 河村城跡　3 川村小学校裏　4 丸山頂　5 大久保平Ⅰ　6 大久保平Ⅱ
7 浅間山山頂　8 春日山砦　9 山北中学校　10 堂　山　11 山北駅南　12 カラヌ山）

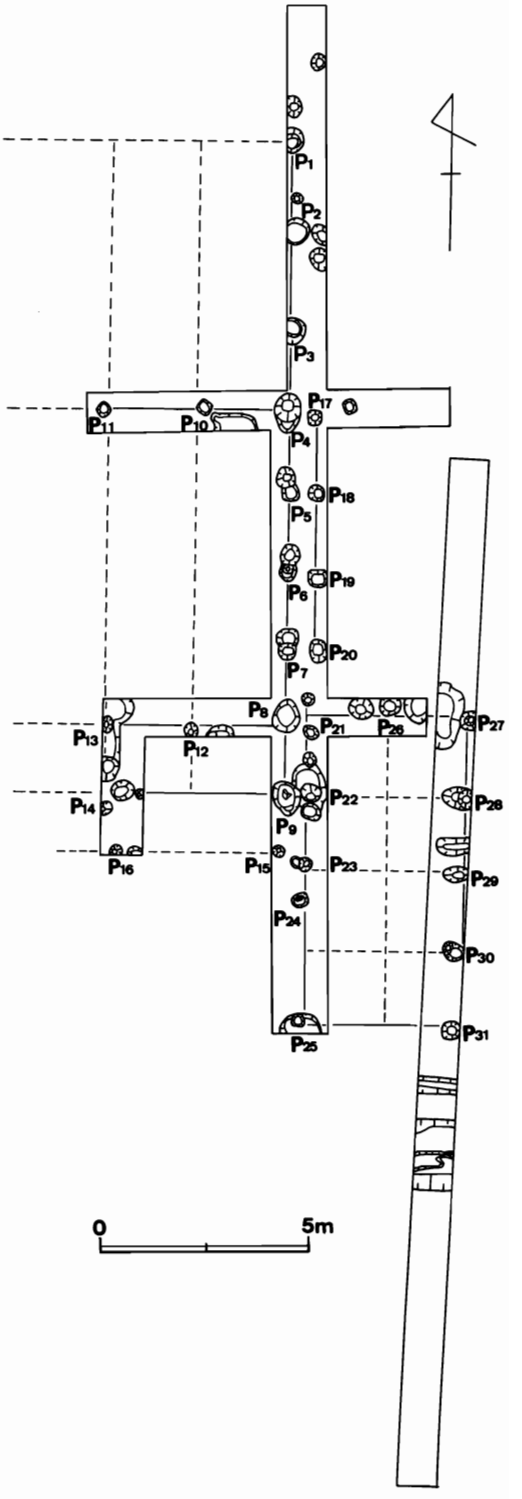


第2図　発掘トレンチの位置と各遺構群想定図

持つ急崖で、中・近世期に比較してその後もかなりの侵食をうけて段丘面は後退しているようである。なお、浅間山頂上（第１図－７）でも試掘トレンチ調査を行ったが遺構・遺物は認められなかった。

段丘面での調査地点と検出された遺構群は第２図に示したとおりである。このうち第１～19トレンチが平成５年度に、第20～40トレンチは平成６年度に発掘調査を実施したものである。各トレンチで検出された遺構には館堀、掘立柱遺構、土壙墓、土壙、小溝状遺構、硬化面、礫群、ピット等をみるが、これらの伴出遺物からすると大半は15～16世紀の所産とされる。なかでも、巨大な方形居館址２館が時期差をもって確認されたことは大きな成果であった。館址Ａについてはおぼろげに把握できただけであったものの、館址Ｂは館堀の折れ曲がる北東（第34～40トレンチ）、北西（第１・２トレンチ）、南西（第４・５トレンチ）各隅の状況が把握されたことで大略の範囲は押さえられた。それによれば、館堀で区画された面積は約30000㎡にも及び、その規模からみてもかなりの豪族の居館址と考えられる。また、館址Ａの総面積も約20000㎡以上と予測され、これまた他に比類の少ないものとされる。両居館址内には大形の掘立柱遺構が確認されている。特に、SB－02（第３図）は南北８間と思われる主屋に隣接して脇屋が設けられており、主居が総柱形式の建築法をなすうえに、庇や回廊の存在も予測させることは豪族居館としてふさわしいものといえる。これらの掘立柱遺構と館堀をその主軸方位から比較すると、SB－02は館堀Ｂに、同じく大形なSB－01や柵列の可能性もあるSB－03等は館堀Ａに対応しているようで、断言はできないもののそれぞれで館址を構成していたようにも思える。なお、SK－01・02ではいずれも一体分の人骨が確認されており、SK－01からは古銭７枚と刀子等の副葬品とともに鉄釘も出土している。

以上のような概要となるが、いずれにしても居館（河村館）を中心とした根小居の状況と詰めの城（河村城）とをセットで調査・研究のできる学術上非常に貴重な資料が遺存しているわけで、今後の調査に期待するところは誠に大きいものがある。



第３図　SB－02（第28～31トレンチ）実測図

11. 小田原市三の丸小学校内遺跡（小田原城三の丸・藩校集成館跡）

戸田哲也・小林義典・香川達郎・中村哲也

1．所　在　地　小田原市本町１丁目853番地６号

2．調査主体　三の丸小学校内遺跡発掘調査団

3．調査担当者　戸田哲也・小林義典・香川達郎・中村哲也

4．調査目的　三の丸小学校新校舎建設に伴う埋蔵文化財事前発掘調査

5．調査期間　1993年１月７日～1994年６月18日

6．調査面積　約5,000㎡

7．遺跡の位置と歴史

調査地点は小田原市本町１丁目853番地６号に所在し、ＪＲ小田原駅の南0.8km、小田原城天守閣の南東0.4kmに位置する。

調査対象となった地点（旧本町小学校）は、近世小田原城三の丸箱根口の東側に大きく展開する武家屋敷であったことが小田原城城絵図等から知ることができる。それによれば、稲葉氏の時代には松原善太夫、杉原吉大夫などの小田原藩の家老級の屋敷地であり、後期大久保氏の時代には藩の役所である御用所となり、その後の文政５年（1822）には藩主大久保忠真によって藩校「集成館」が創設されている。

明治以降は、藩校所在地であったことと関連してか、「日進館」、「幸学校」、「小田原第一尋常高等小学校」となり、戦後は「本町小学校」と名称を変えながらも学校が存続し（現在は本町小学校と城内小学校が統合して三の丸小学校）、小田原市域の教育の中心的な場所として今日に至っている。

8．調査に至る経過と方法

今回の発掘調査は、市立三の丸小学校の建設に伴う埋蔵文化財の事前発掘調査である。

三の丸小学校内（旧本町小学校）は小田原市No.224遺跡として登録される周知の遺跡であり、これまでに1982年（昭和57）の体育館建設に伴う調査、1990年（平成２）には三の丸土塁及び校地内の遺構確認調査が実施され、小田原北条時代から江戸時代までの小田原城に関連する遺構が５～７枚の地業面にわたり存在することが明らかになっていた。

調査対象となった新校舎の建築エリアには、従来からの３階建て本町小学校校舎及び関連施設が存在し、調査区域の６～７割は、それら建物基礎によって遺構の破壊が進んでいると予想されていた。しかし、調査の結果は、以下に記述するように、調査区全域から各時期にわたる多数の遺構が検出され、予想をはるかに上回る結果となった。

調査はまず、試掘調査により箱根口３号堀を初めとする各遺構の位置確認を行い、その後作業を安全・迅速に進めるための鋼矢板を調査区西側から東側に向け打ち込む。1993年１月から３月中頃までに校舎基礎等のコンクリートを取り除き、その後、遺構確認・遺構精査という手順で西側から東側に向け調査を進行していった。なお、発掘調査は本来的には各時代の遺構面を全体的に掘り下げながら、各時代毎に調査して行くことが基本であるが、建築工事との兼ね合い等から調査区を大きく４分割し、調査終了次第順次、校舎関連工事に着手するという方法を余儀なくされた。

9．調査の概要

調査により確認された遺構は、堀（箱根口３号堀）１条、土坑244基、方形石積土坑７基、溝40条、井戸25基、玉石積水路２条、石垣積水路２条、玉石敷遺構６条、縁石を有する砂利敷面（道）１面のほかに、組石、石敷遺構及び掘立柱建物址と考えられる柱穴多数（500個以上）が検出された。

遺物は大型収納箱に約800箱あり、その内容は次のごとくである。

平安時代　土師器・須恵器

戦国時代（小田原北条時代）　中国明染付磁器・白磁・青磁・瀬戸・美濃・天目碗・鉄釉皿・擂鉢・常滑甕・カワラケ・その他（金属製品・砥石・石臼・石塔類等）

江戸時代（近世）	伊万里（肥前）・鍋島藩窯製品・瀬戸・美濃・益子・京焼等の陶磁器類、瓦・カワラケ・金属製品・砥石・石臼等

遺構の時期は平安時代、大森時代・小田原北条時代～江戸時代に属する。以下に主要遺構について若干の説明を加える。

堀（箱根口３号堀）

この堀は1986年に実施された本調査区西側に位置する道路部分の調査（1992　諏訪間・井上他　小田原城三の丸　箱根口跡）で確認された箱根口３号堀から連続することが明らかとなり、前述報告書との整合性を考慮し、「箱根口３号堀」と呼称する。

堀は調査区西側から約20m東に延び、北側に90°方向を変えてカギの手状（クランク）に屈曲する。堀天端幅は、調査現況で最大14mを計測するが、旧校舎基礎により失われた部分があり、本来の堀天端幅は16m前後の規模を有していたと推測される。堀底面には浅（低）い障子堀（中堀の障子堀Ｂ類に類似）が存在し、堀底幅は３～４ｍを計測する。

堀覆土は大半が人為的に埋められたローム・ブロックを多量に含む土層であり、堀機能時に堆積した土層は、堀底面から10～30cm程度の黒色有機質土の堆積で、堀の存続期間は比較的短期間であったと推測された。

出土遺物は底面近く、あるいは前述黒色有機質土から中国明代の染付磁器、志野皿等、小田原陶磁器編年Ⅲａ期の遺物出土が認められることから考え、16世紀末～17世紀初頭の慶長年間頃にこの堀が構築・使用されたと推定される。また、人為的に埋められたと考えられるローム・ブロック主体層からは多量の瓦が出土した。

この堀は、寛永９年（1632）の稲葉氏入封以降に開始された小田原城近世化工事の姿をあらわすとされる正保図（1644～1654年頃成立）及びそれ以降の城絵図には記載されておらず、寛永９年以前に構築されたことが絵図からも推定できよう。

また、堀底に付設される不規則で浅い構造の障子堀（堀障子）は、小田原城二の丸中堀（住吉堀）、あるいは三の丸東堀第Ⅱ地点（東電地点）でも検出され、その年代は本堀同様に小田原Ⅲａ期の陶磁器類の出土から16世紀末～17世紀初頭に位置づけられ、こういった堀底面構造が小田原城域での当該期（前期大久保期）を特徴づける遺構である可能性を指摘できよう。

土坑

土坑には、規模の大小及び時期に異なりがあるが、244基を検出した。そのうち特徴的な例について説明を加え、以下に記述する。

69号土坑からは厚手のカワラケが比較的多く出土している。これらカワラケは小田原市域での出土例は現在までのところ少なく、小田原北条時代以前の大森時代に属する可能性もある。

６号土坑は長辺8.5mを計測する隅丸長方形の平面プランを有する大形の土坑であり、長辺に沿って階段状の入口施設が付設されている。一般的には「地下室（ちかむろ）」と呼称しており、使用時には上屋施設のある半地下式構造であったと思われる。出土した陶磁器類から17世紀中頃の時期と考えられる。

64号土坑は最大径約10m・深さ1.8mの略円形平面プランを有する土坑である。覆土中に多量の焼土・炭化物と共に火を受けた陶磁器類・瓦・金属製品を大量に検出した。遺物の多種にわたる出土状況から考え火災の後始末の痕跡と考えられる。その時期は、出土遺物から18世紀前半頃と考えられる。

出土遺物として注目されるものに、鍋島藩が将軍家・大名家等の献上用に焼造した「鍋島」と呼ばれる極良質磁器の破片がやや多く出土したことが挙げられ、神奈川県下の遺跡での出土としては初例である。

方形石積土坑

方形石積土坑は７基が確認されている。土坑の壁に沿い石が積み上げられる。

河原石を木口に積み上げるタイプと江戸時代の石垣に使用される間知石によるタイプが存在し、大まかには前者が小田原北条時代、後者が江戸時代の所産と考えられる。使用時にはいずれも上屋の存在する半地下式の構造を有していたのであろう。

溝

溝は南－北または東－西方向に延びを有する

40条が検出された。以下に主要な溝について記述する。

23号溝は幅３～４ｍ・深さ1.5mを計測する大規模な溝であり、東－西方向にほぼ一直線に70mを確認したが、調査区外の西側・東側にさらに延びをもっている。底面近くのやや粗い砂層から９世紀後半～10世紀中頃の土師器坏の完形品が出土しており、中には地名と考えられる墨書のある坏も検出された。今回の発掘調査では最も古い遺構である。

19号溝は方形に区画する溝であり、遺物出土はないものの、遺構確認層位から前述23号溝より新しく、後述する27号・29号溝（小田原北条時代）より古く、現在までのところ戦国時代以前の遺構と考えている。その規模・形状から何らかの区画を意図した溝であろうと思われる。

27号・29号溝は南－北方向の延びをもつ溝であり、約40mの間隔をもって構築された対をなす溝と考えられる。29号溝からは500個体以上の大量のカワラケが出土したほか、27号溝からは29号溝と同様のカワラケに天文21年（1552）１月７日と刻まれたカワラケの出土があり、カワラケ編年に重要な資料を呈示したと言えよう。また、上述カワラケ同様に注目される例として３号玉石敷遺構出土の金箔カワラケがあり、小田原市城で初めて出土した例で小田原北条時代を特徴づける遺物といえる。

井戸

25基の井戸が確認されている。構造的に大きく分類すると、素掘りタイプと玉石（河原石）積みタイプがあり、前者は砂層を0.5～１ｍ掘り込み、後者ではさらに下部の礫層まで掘り込んでいる。平面規模も底面から石積みを行う関係から大きくなっている。また、素掘りタイプの井戸が出土遺物からみて古式である可能性が高く、素掘りタイプは小田原北条期、石積みタイプは小田原北条期～江戸時代と捉えられる可能性が高い。なお、石積みタイプの井戸には石材の積み方・構造に差異があり、そこに時期差あるいはそれらを構築した職人たちの伝統、系統の異なりが存在した可能性を指摘できよう。

井戸内部構造（石積みタイプ）には蓋・底のない桶を底面から連絡するタイプや底面に厚い板材を井桁に組むなどバラエティーに富んでいる。

今後、解決しなければならない問題としては前述井戸構造の差異及び時期差に加え、各々の井戸が当時の屋敷内にどのように配置されていたか、もし仮に同時期の井戸が存在するとすれば、屋敷割り等、当時の土地利用・屋敷内構造がどういうものであったかを明らかにすることと考える。

玉石積水路

玉石積水路は２条確認された。いずれも南－北方向の延びを有している。楕円球状の河原石を木口に数段積み上げ構築されている。

２号玉石積水路は校舎基礎、南側は土坑により壊されているが、その形状を比較的良くとどめている。その時期は出土陶磁器類から小田原北条時代の所産である。

柱穴

柱穴は全体で500個以上が検出されているが、特にＱ～Ｊ－２～４区にまとまりをもって存在する。

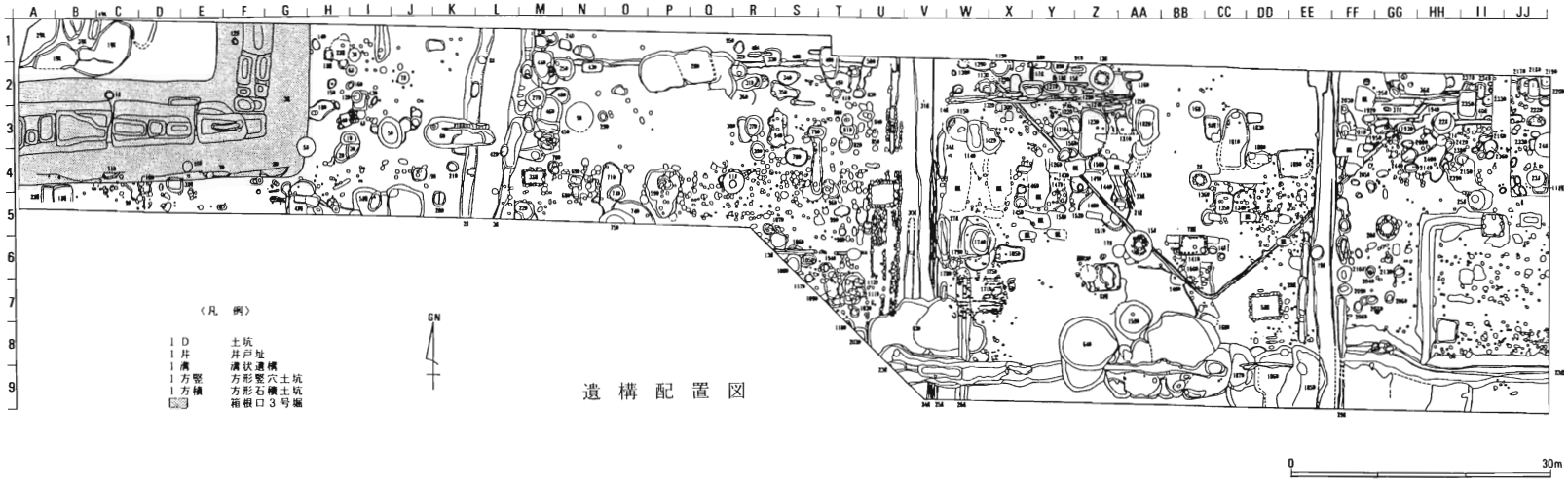
底面に礎石となる扁平な河原石を設ける場合と素掘りタイプが確認されている。これらの中には規則的な配置で柱穴が並ぶものもあり、掘立柱建物址、総柱建物址ととれるものもあるが、調査範囲の問題や校舎基礎により壊されている部分もあり、全体像をつかみにくい状況であった。

時代的には、出土遺物から小田原北条時代・江戸時代共に確認されているが、規模が推定できる小田原北条時代の例は、東－西方向が10～15mを計測することから考え、当時の小田原地域としては比較的規模の大きな建物であったと思われる。

10. 小　結

今回の発掘調査によって前述してきたような遺構・遺物を確認することができた。以下に調査によって導き出された成果あるいは問題点について記述する。

箱根口３号堀は前期大久保期に構築されたことがほぼ確定したと考える。また、堀の大半を埋めつくすローム・ブロック主体層は一時期に堆積したことを物語っている。これは、慶長19



小田原城と発掘調査区　南側上空より

調査区西側空撮上空より

年（1614）に徳川家康・秀忠父子によって行われた大久保忠隣の改易に伴う小田原城大破却による一連の破壊行為あるいは、寛永9年（1632）以降の稲葉氏による小田原城近世化工事によると推測される。

当時、大久保忠隣は老中として徳川家康・秀忠の信頼も厚く、江戸幕府にとって、西方からの防衛上重要な小田原城を任されていた。しかし、忠隣は本田正信との勢力争いや忠隣が重用した金山奉行大久保石見守長安の不正事件等が原因で失脚・改易されたとされている。

また、改易の原因としては、当時まだ未完成であった江戸城よりも小田原城の規模が大きく堅固であり、この堀を含め小田原城をさらに強固な城に補強していた事実が近年の発掘調査により明らかになりつつあり、江戸幕府や江戸城を守る意図があったとしても、大坂冬の陣をひかえた当時の不安定な政治状況を考えると謀反の疑いをかけられる要因となったとしても、いたしかたないとみることも可能であろう。

69号土坑等から出土した厚手のカワラケは小田原北条時代以前の大森時代にさかのぼる可能性がある。詳細な検討は今後の整理作業に委ねられるが、小田原城域の発展過程・起源を知る上で重要な資料となると推測される。

また、小田原北条時代には南－北方向に延びをもつ溝・玉石積水路等で区画し、その間に建物や井戸・土坑等が配置され、該期の地業面が少なくとも2～3枚存在することが明らかとなった。

遺物として注目されるものに27号溝から天文21年（1552）1月7日と刻まれたカワラケが、29号溝からは27号と同様（同型式）のカワラケ多量（数百枚～千枚以上）出土、及び3号玉石敷遺構から出土した金箔カワラケが挙げられる。

天文21年1月7日と刻まれたカワラケは、その製造・使用年代を示すばかりか、この地で正月行事の饗宴がなされたことを示す資料となるとも考えられ、型式学的興味だけでなく、土地利用までも言及できる資料となろう。

江戸時代の遺物で注目されるものに、神奈川県下で初めて出土した鍋島藩窯の製品がある。土坑等あるいは包含層出土であり、色絵皿（7寸）・染付皿・青磁皿・向付等の器種があり、そのいずれもが「鍋島」最盛期である18世紀前半代の製品であった。

明和2年（1765）鍋島藩主重茂公が滞在したお礼にと磁器を大久保家に送った記事がある。この記事との直接的な関係は定かでないものの、「鍋島」製品が将軍・大名の贈答品として焼造されたことを考慮すれば今回出土した鍋島藩窯製品もそうした来歴を有していたと思われる。

19号溝・23号溝は戦国時代以前の遺構であることが確認されている。

19号溝は遺物の出土は認められないものの、その確認面の異なりから平安時代の23号溝より新しく小田原北条時代の遺構群より古期である公算が高い。

23号溝の底面及び下層からは9世紀後半～10世紀中頃（平安時代）の土師器坏（相模型）が比較的多く出土した。完形品もあり、その中には墨書による地名と推定される文字が記される例も存在する。

溝の規模は前述したように大きく、単なる集落址ではなく、有力者の館あるいは未命名・未発見の官址の存在する可能性も指摘できよう。

なお、戦国時代（小田原北条時代）以前の遺構の存在については当初まったく考えておらず、意外な発見であったばかりでなく、当該地が平安時代にすでに計画的な土地利用がなされたことが明らかになり、今後の小田原城域の歴史を繙く際のキーポイントになると思われる。

第19回　神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨

発　行　神奈川県考古学会
編　集　神奈川県遺跡調査・研究発表会
川崎地区準備委員会
(川崎市教育委員会文化課内)
発行日　1995年9月23日
印　刷　文昭堂印刷株式会社